

Fate Grand Order 絶対 魔導王政ブルボン

華原晋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

18世紀末のフランスで特異点が観測された。

藤丸立香とマシユは、ジャンヌダルク（オルタ）を連れ、特異点の修復に向かう。

フランス革命の鎮圧に成功したブルボン王朝。

そこは「魔導」と呼ばれる「魔術」に類似した力を使う第二身分達が、一般人である第三身分を支配する世界だった。

絶対王妃として君臨するマリー・アントワネットの正体とは？

ナポレオン大元帥とは何者なのか？

そして第二身分達が操る『魔導』とは？

フランス革命、人類史の血塗られた至高の華の時代を舞台に

——人々は『革命』と、真の『英雄』の出現を知る。

※F G Oのシナリオライター志望、こちらに掲載させていただきます。

シナリオなので、基本会話形式です。一部一章オルレアンまでのクリア推奨。

目次

プロローグ 観測された特異点 1

血の都パリ 10

革命の美女 ジエネット 22

魔導の王女 マリー・アントワネット 28

28

聖魔女ジャンヌダルク 34

革命のモグラ 42

ベルサイユ潜入作戦 52

太陽王の宮殿 58

晩餐会 64

王妃マリー 70

吸血鬼キルシュタイン 80

怪人カリー・ド・マルシエ 89

聖杯 99

密室の会合 106

公寵姫ローズ 114

ローズ救出作戦 128

元公寵姫ローズ 136

ロベスピエール救出作戦 143

理想の血塗られた右腕 148

テンプル騎士団と聖杯 155

テンプル塔最上階 160

魔法使い 165

革命 170

太陽王の王冠 177

ヴァルミーの戦い	265
軍神の威光	261
クウニーとローズ	256
決戦前夜	246
魔術工房	238
バスチーユ陥落	228
革命の女神	223
革命問答	217
宝具共鳴	210
断頭台	203
高潔の人	199
路地裏の誘い	194
革命前夜	188

勝利の女神	271
軍神復活	275
皇帝の采配	285
突破	291
矛盾の皇帝	299
女帝マリア・テレジア	306
即位式の招待	312
運命の皇子	318
フランス人民の王	325
不敗の元帥(完結)	335

プロローグ 観測された特異点

—— “君主は、愛されるより、恐れられよ” ——

帝王学の初步にある、あまりに有名なマキヤベリの言葉

だがこの言葉に比べ、次の言葉はあまり知られていない。

—— “何故なら、愛は憎悪に変わりやすいから” ——

王者としても教育を受けたボクはその言葉を知っていた。

だがその言葉の真の意味を知ったのは、フランスから逃げ出そうとして失敗した、いわゆるヴァレンヌ逃亡事件の後だった。

その結果ボク達は、深く決意した。

どんなことがあつても、この宿命を、彼らの愛と憎悪を受け入れよう、と

たとえば断頭台の露と消えることになろうとも

決して彼らを恨まない

ただ、たったひとつだけ、人生に心残りがあるとすれば

あの日あの時、君を笑つて見送れなかつた事、かな

【某日、カルデア】

ダ・ヴィンチちゃん

「早速来てもらつて悪いね。早速だがマシユ、立香君、フランスで特異点が観測された」

マシユ

「フランスですか？ オルレアンに続いて二度目ですね」

ダ・ヴィンチちゃん

「その通りだ。ただ時代が違う。前回は15世紀のジャンヌ・ダルクが活躍していた時代だったが、今度は18世紀末だ」

マシユ

「18世紀末のフランス。ちょうどフランス革命の時代ですね」

ダ・ヴィンチちゃん

「フランス革命。人類史の血塗れた至高の華。

自由、平等、博愛と、壮絶な殺戮の時代。だが観測できたデータは、少し違うものだった」

マシユ

「どういうことですか？」

ダ・ヴィンチちゃん

「データが不十分なので推測に頼るしかないが、何らかの『事情』で、1789年を経過してもフランス革命は起こっていない。より正確に言えば、フランス・ブルボン王朝が、大きな『力』をもってして、革命の弾圧に成功した世界、とっていいだろう」

マシユ

「フランス革命を、鎮圧できるほどの力、それって……」

立香

「『聖杯』でしようか」

ダ・ヴィンチちゃん

「ご明察の通りだ。」

おそらくブルボン王朝は何らかの形で聖杯を手にし、その力をもって、旧体制（アンシャンレژیーム）の維持に成功したのだろう」

ダ・ヴィンチちゃん

「本来の歴史では、フランス革命後の列強との革命戦争の英雄としてナポレオンが台頭し、ヨーロッパ中に民主主義の理念が広まるきっかけとなった」

マシユ

「では、フランス革命が起こらなければ・・・」

ダ・ヴィンチちゃん

「ヨーロッパの、ひいては世界の歴史は数百年は遅れただろうね」

ダ・ヴィンチちゃん

「前置きが長くなってしまったが、目標はフランス、ブルボン王朝の旧体制（アンシャンレジーム）が保有しているであろう聖杯の奪還だ。」

手ごわい敵が予想されるが、こちら側はリソース不足だね。君たち以外には一人しか送ることはできなさそうなんだ。というわけで彼女に来てもらうことにした」

ダ・ヴィンチちゃん

「フランスの危機と言えば、彼女だろう。聖女ジャンヌ・ダルクだ。来てくれたまえ」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「……………」

ダ・ヴィンチちゃん

「あれ？ 私が呼んだのは白い方のジャンヌ・ダルクちゃんだけど……」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「うっさいわねー！ あいつはイルカと遊んでて忙しいみたいだから、私が来たの！」

ダ・ヴィンチ

「しかし、フランスで人気があるのは聖女の方のジャンヌ・ダルクであつて、君の方じゃないんだけど……」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「どういゝこと!? 私じゃあ力不足ってことかしら!？」

ダ・ヴェインチ

「うん」

「どうしよつか立香君。マスターである君の判断はどう？」

立香

「どうしても同行したいの？」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「別に、あの国や国民がどうなっても知ったこっちゃないけど……」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「……あの王妃には、借りがあるのよ」

マシユ

「ジャンヌさん。まだ、オルレアンでの事※を、気にされているのですか？」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「……う、うるさいわね！ 私でいいでしょ？ とつとと行くわよ！」

立香

「わかりました。ジャンヌ・ダルク（オルタ）と同行します」

ダ・ヴィンチちゃん

「立香君がそういうなら、異論はないよ。」

では目標は18世紀末のフランス、パリ近郊だ。よろしく頼むね、三人とも

【レイシスト後】

ジャンヌ・ダルク

「みなさん、遅れて申し訳ありません」

ダ・ヴィンチちゃん

「良いんだよ。代わりに素敵なパーティが組めたからね。イルカはどうだった？」

ジャンヌ・ダルク

「イルカですか？ イルカは知りませんが、どういうわけか廊下に海魔がいて、退治に手間取ってしまいました」

出した海魔はきちんと片付けておくように後でジルに言っておかなければ・・・」

血の都パリ

マシユ

「ここが、18世紀末のフランス!？」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「・・・ずいぶんと薄汚れた街並みね。ここが本当に花の都パリなの?」

ダヴィンチちゃん

「ここは、繁華街から外れた路地裏でしようか。無事にレイシストできましたが、ダヴィンチさんとの通信、安定しません」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「通信が不安定なのはいつものことなんでしょう? そのうちつながるわよ」

マシユ

「とにかく情報収集をしなければいけません。ブルボン王朝がこの年代まで、続いている理由を確かめなければ」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「それもいいけど、まずこの時代の事を確認しておかない？ 知識としてはあるけど、変革が多すぎて、とにかくややこしいのよね」

マシユ

「そうですね。まずこの時代の事を簡単におさらいしておきましょう。

一般的にフランス革命とは、1789年のバスチーユ牢獄襲撃から1804年のナポレオンの皇帝就任までを指します」

マシユ

「増税のために三部会を招集したルイ16世に対し、革命が勃発。革命を率いたロベスピエールはルイ16世が処刑。次いで革命戦争の英雄ナポレオンがクーデターを起こして、その後選挙で皇帝に就任し、革命は終わりを遂げます」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「王政の打倒と理想主義者達による内ゲバの後の軍人政権、なかなかいいじゃない」

マシユ

「確かに多くの血が流れたことは事実ですが、自由、平等、博愛といった現代にまで通ずる理念や、血統主義が否定されて実力主義の世の中になった事など、人類史にとっては重要な出来事です」

立香

「まさに人類史の、血塗られた至高の華、だね」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「了解。大体わかったわ。」

とりあえず情報収集のために聞き込みを始めるわよ。にしても私は生粋のフランス人だけど、貴方たち二人はパリでは目立つわね」

マシユ

「確かにジャンヌさんは生粋のフランス人ですが・・・」

立香

「ジャンヌのその服装の方が目立つよ」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「なんですって！ この服装のどこがダメだっていうの？」

女の声

『——いや!! やめて!!』

マシユ

「女の人の悲鳴!?!」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「行きましよう!」

(とある小さな広場で、人だかりができています)

兵士A

「叫ぶな！ おとなしく右腕を差し出せ！」

母親

「お願いです。ろくに食べ物がなくて栄養失調で、そんなに血を抜かれては……」

少女

「おかあ、さん……」

兵士B

「黙れといっている！ 国王陛下のご命令に逆らう気か!? だたでさえこの地区の血の納付率は低いんだ」

マシユ

「兵士たちが、女の人から血を抜いている？」

先輩、このタルの中に入っているのは！」

立香

「ワインじゃなくて、血液!?!」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「いいわねいいわね、誰が敵かわかりやすくて！ 行くわよ」

（敵の将兵達数名と戦闘の末、撃破。敵将校は魔術に類似した戦闘を行う）

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「意外とやるわね。兵たちは大したことなかったけど」

マシユ

「ええ。特に敵将校とおぼしき人物が使ったのは・・・

魔術!?! でしょうか・・・」

<ダヴィンチちゃん>

『非常に興味深いね。彼らが使用したのは、確かに魔術に非常に類似している技術だ』

マシユ

「ダビンチさん！ よかった、通信ができるようになったんですけ」

<ダヴィンチちゃん>

『いきなり興味深いものを見せてもらったよ。フランス革命のこの時代に将校が堂々と扱う『魔術』。きな臭いっいたらありやしない。』

個人的興味は尽きないが、まずはその呆けている町娘さんを解放するのが第一じゃないかな？』

マシユ

「はい、確かに。」

大丈夫ですか？」

町娘 A

「は、はい。ありがとうございます。」

でも、信じられない、あの『王大陸軍（ロワ・グランダルメ）』の、それも第二身分の将校を倒しちゃうなんて・・・」

<ダヴィンチちゃん>

「『王大陸軍（ロワ・グランダルメ）』に『第二身分』

うゝん。香ばしい、実に好奇心をそそる単語の連発だ」

市民A

「この強さ、このお姿——」

市民B

「まさか伝説の魔女ジャンヌダルク？」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「なあに、助けてあげたのに、また貴方たちは私を魔女あつかいするの？　これだからフランス人は」

市民

「魔女様だ！ 聖魔女ジャンヌ・ダルク様だぞ！」

市民

「聖魔女様だ！」

市民

「ジャンヌダルク様だ！」

マシユ

「——聖魔女？」

立香

「様？」

民衆

「バンザーイ!!」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「万歳!?!」

市民

「おお伝説の聖魔女様！　どうか我ら第三身分を、第二身分による圧政からお救いください！」

市民

「聖魔女様！　血税から私たちを解放してください！」

市民

「パリを、フランスを救ってくれ!!」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「ちよつと！　何よこれ、何なのよあんたたちは一体!?　もう!」

マシユ

「ものすごい熱狂ですが、目立ちすぎな気が……」

謎の美女

「ジャンヌさま、皆さま、こちらに」

マシユ

「貴女は？」

謎の美女

「私は、おそらくあなた方と志を共にする者です。ささ、早く。騒ぎを聞きつけて王・大陸軍（ロワ・グランドルメ）の兵士が集まって来る前に」

マシユ

「ど、どうしましょう？ 先輩」

立香

「とにかくここから離れないと」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「仕方ないわね。この民衆はほつといて、さっさと逃げるわよ」

革命の美女 ジエネット

【路地裏の、とある倉庫の中】

謎の美女

「ここまでくればひと安心です」

マシユ

「助かりました」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「ふう、人気者つてのも、なかなか大変ね。

あの熱狂ぶり、尋常じゃないわ」

謎の美女

「仕方ありません。伝説で語られるジャンヌ・ダルク様が現界して、恐るべき“魔導”を

使つて第二身分の将校を撃破してしまつたのですから」

マシユ

「『聖魔女の伝説』に『魔導』ですか。どちらも聞いたことのない言葉ですね』

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「で、貴女は何者なの？」

謎の美女

「はい。自己紹介します。私の名前はジェネット。

セント・ジェネットと申します」

立香

「藤丸立香です」

マシユ

「マシユ・キリエライトです」

ジエネット

「よろしくお願ひします。そちらのお方は伝説のジャンヌ・ダルク様で合っていますでしょうか？」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「そうよ、正真正銘（オルタだけど）のジャンヌ・ダルクよ。つてアンタの名前を聞いてるんじゃないわ。立場を明らかにしなさい。さっき私たちと志を共にする者」つて言つてたけど、どういうこと？」

ジエネット

「はい。私は第二身分の『魔導』による支配から、第三身分を解放する者。つまり『革命』を目指す『第三身分解放同盟』のメンバーです」

マシユ

「第三身分解放同盟・・・」

<ダヴィンチちゃん>

『文字通り第三身分を解放するメンバーということか。』

命がけで正体を明かしてくれたお礼に、私も自己紹介に加えてもらおうかな？ レオ

ナルド・ダヴィンチ。この時代のパリっ子なら、私の事も知っているはずだ』

ジェネット

「初めまして、ダヴィンチ様。」

絵画で知るモナ・リザそっくりですね」

<ダヴィンチちゃん>

『あれは自画像みたいなものだからね。しかし、半透明の私のこの姿に驚かないとは、なかなかやるね』

ジェネット

「そのお姿は魔導の一種であると理解しています。それよりも、かのレオナルド・ダヴィンチが女性であったことの方が驚きです」

<ダヴィンチちゃん>

『肉体の性別なんて、魂の在り方にくらべれば大したことじゃないさ。

ジエネットちゃんも、そう思うだろう?』

ジエネット

「その考え方には、全面的に賛成です。私達、とても仲良くなれそうですね」

<ダヴィンチちゃん>

「ふふ、こんなに意見が合う人は初めてだ。いろいろと教えてくれ、答えられる限りで、こちらにも質問には答えるからさ」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「ずいぶんとこの娘のことを信頼しているみたいだけど、大丈夫なの?」

<ダヴィンチちゃん>

『私たちの目的は、ブルボン王朝の終焉だから、革命家である彼等と目標は同じなはずだ。』

彼女が革命家の一人なら当然、この国の状態についても詳しいだろう。加えてある程度の魔術側の知識もある。こんな人材は、願ってもないさ」

ジェネット

「私も、あなた方が言う『魔術』について、とても興味があります。特に第二身分が使う『魔導』とあなたたちが使う『魔術』の違いについて」

魔導の王女　マリー・アントワネット

ジエネット

「まず私が、祖国フランスの現状について、説明しましょう。

すべての異変は、オーストリア帝国から、王女マリー・アントワネットが輿入れしてきたことから始まったのです」

〈ダヴィンチちゃん〉

『ほう』

ジエネット

「オーストリア王女マリー・アントワネットは普通の王女ではありませんでした。彼女は『魔導』という不思議な力を持ち、輿入れするや否や、不可思議な『奇跡』を実現し、人々を驚かせました」

ジエネット

「何もないとこから火をおこしたり、糸で作った傀儡を、まるで生きている動物の様に操ったり、病人の病気を治したり」

マシユ

「マリーさんが・・・」

〈ダヴィンチちゃん〉

『まるで？ 魔術？ だね。この世界のマリーは、魔術刻印あつたのかね』

ジュネット

「そしてより重要なことは、マリー王妃は自分の臣下である貴族たちに、その奇跡の力を分け与えることができたのです。王妃と、同じく魔導に目覚めた国王ルイ16世は、その奇跡の力をお気に入りの部下たちに分け与えました」

〈ダヴィンチちゃん〉

『前言撤回だ。そこはまるで“魔術”とは異なる。魔術は基本的に一子相伝だし、それに魔術刻印は決してほしいと分け与えられるものじゃない。そんなことが可能なら、

それは魔術刻印と似て非なるものだ』

マシユ

「秘すことこそが魔術の本質と言います。そもそも公にできる時点で魔導は明らかに魔術とは異なるものです」

ジエネット

「そして魔導の力を分け与えられた貴族は自ら“魔導貴族”を名乗り、その力を背景に新たな特権階級、“第二身分”を形成しました。そして魔導を与えられなかった人々を、“第三身分”として支配したのです」

〈ダヴィンチちゃん〉

『我々が知るフランスの身分制度とずいぶん異なるね』

ジエネット

「第二身分である彼ら貴族は、国民に対し新たな税を課しました。それが血液に対する税です」

マシユ

「それが、あの血がたくさん入っていた樽ですか」

〈ダヴィンチちゃん〉

『まさに、血税だね。だが血を集めてどうするのだろうか?』

ジエネット

「私も詳しくは知りませんが、血液と魔導には何らかの関係があるみたいです。集められた血液は、樽に詰められて毎日のようにどこかに運ばれています」

〈ダヴィンチちゃん〉

『そこは理解できる。血液は、魔力と切っても切れないものだからね。集めた血液は何らかの形で魔導に使われるのだろうか』

ジエネット

「ここ最近のフランスでは凶作が続いていて、血税はまさに命を削り取る過酷なもので

す。血税の負担に耐え切れない人も多いのです」

マシユ

「それが先ほどの騒動でしたか」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「ふざけた世界ね。誰も、その『血税』に対して、抵抗しなかったの？」

ジエネット

「もちろん抵抗する人々はいました。真っ先に異議を唱えたのは、ロベスピエール様でした」

〈ダヴィンチちゃん〉

「フランス革命時における高名な革命家ね」

ジエネット

「しかし、抵抗は鎮圧され、収監されてしまいました」

<ダヴィンチちゃん>

『やはり、魔導を持つ貴族たちには勝てなかったってことかな?』

ジエネット

「それもあります。しかしそれ以上に、王政側に強力な軍事指導者がいたのです。それが “大元帥ナポレオン” です」

マシユ

「え!?’

立香

「ナポレオンだって!?’

聖魔女ジャンヌダルク

ジエネット

「王妃によって見いだされた若手軍人ナポレオンは、旧態依然としたフランス王国陸軍とオーストラリア陸軍を解体して新たに「王大陸軍（ロワ・グランダルメ）」を創設。その圧倒的な軍事力で民衆の反乱を鎮圧しただけでなく、列強の軍隊をも撃破してヨーロッパの大半を征服してしまいました」

〈ダヴィンチちゃん〉

『流石は軍神ナポレオンといったところか。』

ありがとう。これで大体の状況は把握できたね。おそらく「聖杯」は王妃マリー・アントワネットが持つていて、それが「魔導」の力の源であると考えて間違いない」

マシユ

「しかし、マリーさんがそんなことをするとはとても考えられません」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「どうかしら？ あの王妃も暗黒面に落ちれば

パンが無ければピZZアを食べればいいじゃない” って感じになるわよきつと。

それよりも、私にとっては一番大切な疑問が残っているんだけど？」

ジエネット

「それは何でしょうか？」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「決まっているわよ。どうしてジャンヌ・ダルクが『聖魔女』なの？」

<ダヴィンチちゃん>

『確かに、ジャンヌダルクを神聖視する風潮はこの当時のフランスにもあったが、それは聖女であつて聖魔女なんてものではないからね』

ジエネット

「ああ、それについては、私の友人から直接説明した方がいいでしょう。ちょうどお店に来る時間帯です。どうぞこちらに」

マシユ

「お店、ですか？」

<ダヴィンチちゃん>

『へえ、この家の表は酒場だったんだ。ジエネットちゃんのお店かい？』

ジエネット

「いいえ、店長が行方不明になってしまったらしくて、一時的に私がお借りしているだけです。」

でも、酒場はいろいろと都合なんですよ。いろいろな情報が集まりますし、人が集まっても共謀を疑われにくいですから」

ジエネット

「あつ、みなさん集まっておられましたか」

気弱そうな紳士

「やあ、同志ジエネット君。先に上がらせてもらっていたよ」

ジエネット

「同志シエイエス様。もう来られていたのですね」

シエイエス

「ああ、町で噂の聖魔女を、謎の美女が連れ出したという噂を聞いてね。きっと君だと
思っていたよ」

ジエネット

「はい。こちらは『聖魔女』ことジャンヌダルク御一行様です。

皆さんにも紹介します。我らがパリ解放同盟の盟主、同志シエイエス様です」

<ダヴィンチちゃん>

『エマシユエルⅡジョセフ・シエイエス。その名はデータにある。フランス革命初期の

リーダーだね。その後、ロベスピエールら他の革命家との内ゲバに敗れて地下に潜伏して逃げ延びた。通称『革命のモグラ』

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「あだ名が革命のモグラ・・・」

——「だっさ」

シエイエス

「モグラと呼ぶでない！」

ジエネット

「同志シエイエス様は、皆の思想的なリーダーでもあり、その臆病・・・いえ用心深さから他の同志たちが逮捕されても、今まで逃げ延びることができた方なのです」

シエイエス

「ふん。」

しかし、なるほどクウニー君。君が書いた小説のジャンヌダルクのイメージにぴった

りだね」

クウニー

「・・・そうだな。確かに俺の作品に登場する

聖魔女ジャンヌ・ダルクそのものだ」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「どういうこと？」

ジエネット

「同志クウニーは小説家の卵で、ずっと売れなかったんですけど、最近書いた革命宣伝用の小説がヒットしたんです。それが『聖魔女ジャンヌ・ダルク』。圧政に疲れた民衆の前に聖魔女ジャンヌ・ダルクが現れ、民衆たちを救うという小説です」

クウニー

「たまたまヒットしただけだ」

ジエネット

「そんなことないわ、クウニー。貴方は恋愛物よりも、ああいった作品の方が向いているわ。だってあなたの恋愛小説、ちつとも面白くないんだもの」

クウニー

「フン、ほめているのかけなしているのか、どっちなんだ」

ジエネット

「もちろんほめているのよ」

クウニー

「まあいい。それで、彼女が聖魔女ジャンヌ・ダルクというわけか。町でも噂になってるぞ。後ろの二人の外国人もだ」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「げ、また民衆に囲まれちゃう」

ジエネット

「それなら私が手を貸すわ。大丈夫、お化粧して服を着替えればバレません。お化粧は得意だし、服も色々もっているから、安心して下さい」

マシユ

「それは、いろいろと助かります」

革命のモグラ

大柄の若い男

「ジエネットちゃん、オレの話を聞いてくれ!!」

小太りの中年男

「こんばんは」

ジエネット

「あら、ミシエルさんにカペー店长」

ミシエル

「聞いてくれよ。シャルロットちゃんに告白したのに、断られたよ〜!」

クウニー

「ミシエル、大の男がでかい声で嘆くな」

ミシエル

「うわーん！」

カペー店長

「さつきからこの調子でね。慰めているのに、泣きっぱなしなんだ」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「・・・いろんな男たちが来るわね」

ジエネット

「えくと、大柄で泣いているのが、樽屋のミシエルさん。慰めているのがカペー店長で、鍵屋を営んでいるわ。二人とも信頼できる人よ」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「大柄の泣き虫男に、さえない小太りのオッサンにしかみえないけど・・・」

ジエネット

「そんなことないわ。カペー店長の作る鍵はパリ一番と評判だし、ミシエルさんは……えーと、乗馬がとっても上手なのよ」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「乗馬と樽屋は関係ないでしょう！

……こいつらも第三市民解放同盟のメンバーなわけ？」

シエイエス

「うむ。優秀な同志たちは皆、逮捕されてしまっていてな。残ったのはこんな連中ばかりだ」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「それで『革命のモグラ』であるアンタがリーダーとして残ったわけね」

シエイエス

「そのあだ名で呼ぶでないってのに……」

ミシエル

「うう・・・やは俺にはジエネットちゃんしかいない！ 結婚しよう」

ジエネット

「だくめ。私、やることはありませんから」

クウニー

「お前、何回目だプロポーズするの。そのたびにフラれているな」

ミシエル

「お前だって元女房のローズちゃんが気になっていただろうに？」

ジエネット

「そーいやあの娘、ルイ16世の公寵妃になって、贅沢三昧の生活をしているみたいですね。ほんの少し前までは、クウニーさんの奥さんだったのに」

クウニー

「・・・あんな女に、興味などない」

マシユ

「——ルイ16世に公寵妃？ それはおかしくないですか？」

クウニー&ミシエル

「??」

カペー店長

「・・・・・・」

君はどうして、そう思うのかね？」

マシユ

「あ、はい。確かルイ16世は、マリイ・アントワネット一筋で、他の女性には一切興味を持たないと聞いたことがあるので・・・」

クウニー

「そんな話、聞いたことないが」

ミシエル

「王様に愛人がいないわけではない。公寵妃だって、何代目だか。みんなすごい美人なんだろうな、いいな〜」

カペー店長

「……………」

立香

「そもそも公寵妃って何?」

〈ダヴィンチちゃん〉

『ブルボン王朝の王に認められた公式の愛人のことだよ。』

マシユの言う通り、ルイ16世はマリー・アントワネット一筋で、公寵妃を持たなかった王だと言われている。それが公寵妃を持っている、か。う〜ん』

マシユ

「不思議な力を持つているマリー王妃に、事実と違うルイ16世。そして魔導という力を使うようになった第二身分の貴族たち」

<ダヴィンチちゃん>

『少なくとも、マリー王妃がいる王宮に原因があると考えて間違いないね。どう考えても王宮を調べるのが一番の近道だ』

マシユ

「しかし、警戒厳重な王宮に侵入するのは難しいかと」

<ダヴィンチちゃん>

『どうしたものかね』

カペー店長

「——うむ。なら手はないこともない」

マシユ

「えー！」

〈ダヴィンチちゃん〉

『・・・どういうことかな？』

カペー店長

「明日、ヴェルサイユ宮殿で大元帥の出征を祝う晩餐会が開かれるが、私の知人の貴族が出席予定でね。その従者としてなら、晩餐会にできることは可能だ」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「ヴェルサイユ宮殿で開かれる晩餐会ですって!？」

立香

「確かに、直接侵入できれば、それに越したことは無いけど」

<ダヴィンチちゃん>

『しかしこの世界に不慣れな君たちだけでは、すぐに疑われてしまわないだろうか?』

ジエネット

「では、私も一緒に行きましょう」

マシユ

「ジエネットさん！」

ジエネット

「私が一緒なら、疑われないと思います」

<ダヴィンチちゃん>

『それは願ってもない申し出だ』

ジエネット

「では今日はお店を閉めて、準備をしましょう。ドレスとか、お化粧とかいろいろと準備

しなければ

マシユ

「あ、お手伝いします」

ベルサイユ潜入作戦

「パリからヴェルサイユに向かう道中」

ジエネット

「みなさん、もうじき馬車はヴェルサイユ宮殿につきます。準備の方はいいですか？」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「しかしこの時代のドレスは窮屈ね。このコルセットとか考えたやつを、とつちめてやりたいんだけど」

マシユ

「先輩、私のお洋服、変ではないでしょうか？」

立香

「フランス人形みたいで、とっても似合っているよ」

マシユ

「あ、ありがとうございます」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「ちよつと、私のドレスへの感想はないの？」

立派

「どうみても立派なフランス貴婦人だね」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「私、生粋のフランス人なんですけど！

・・・まあいいわ。この国とコルセットはいけ好かないけど、ドレス自体は気に入ったわ」

<ダヴィンチちゃん>

『ヴェルサイユ宮殿を調査する前に、まず今回の調査の目的を確認しておこうか』

マシユ

「はい。今回の潜入の目的の一つ目が、この世界に限界した『聖杯』の行方を確認することです」

マシユ

「二つ目は『魔導』と呼ばれている魔術に類似した技術の調査です」

<ダヴィンチちゃん>

『『魔導』については、王妃マリー・アントワネットと関係があることは間違いなさそうだね』

マシユ

「はい。二つ目が、『血税』と称して第三市民達から集めている膨大な血液の行方の調査、です」

<ダヴィンチちゃん>

『これも『魔導』と関係がありそうだ。そしてこれらの証拠から現段階で最も考えられ

る仮説を提唱しよう』

<ダヴィンチちゃん>

『それはマリーアントワネットの吸血鬼化だ。

つまり「魔導」とは、吸血鬼の能力の一種で、「第二身分」とはマリーによって嚙まれた吸血鬼達、という仮説だ』

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「その理屈なら、国民から徴収している「血税」は、第二身分の貴族たちの食料ということになるわね」

立香

「その仮説、現時点でダヴィンチちゃん自身はどう思う？」

<ダヴィンチちゃん>

「うーん、吸血鬼については専門外だから、何とも言えないけど、説としては筋は通っていると思う。特に部下に「魔導」の力を分け与えたというのが、実は吸血鬼化させてい

たという点がね。魔術や、それに類する力は、簡単に他者に分け与えることなど不可能だからね」

〈ダヴィンチちゃん〉い

「ただ、なんか引つかかるんだよな」

立香

「それは、〃聖杯〃が関係しているんじゃないのかな？」

〈ダヴィンチちゃん〉

「マリー王妃が〃聖杯〃を手にして吸血鬼化したという話か。うーん」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「悩んでも仕方ないでしょう？ それを調査するためにわざわざヴェルサイユまで来たんだから」

マシユ

「いずれにせよ、マリー王妃が何らかのカギを握っている可能性が高そうですね」

ジエネット

「みなさん、ついに馬車がヴェルサイユに着きました」

マシユ

「すごい……」

立香

「——これが、ヴェルサイユ宮殿」

太陽王の宮殿

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「ふくん、なかなか荘厳な宮殿ね」

〈ダヴィンチちゃん〉

『ヴェルサイユ宮殿。ブルボン王朝絶頂期の王、太陽王ルイ14世が建造した宮殿だ。パリからおよそ20キロの時点にある、王族と貴族、その使用人たちを含めた人口数万の宮殿都市だ』

立香

「ルイ14世って、それほどすごい王様だったの？」

〈ダヴィンチちゃん〉

『通称 “太陽王” 』。

4歳で即位し、72年にわたってフランスに君臨した完璧なる絶対君主。官僚機構を

整備して在野から人材を抜擢し、財政と軍備を強化して、フランスを欧州最強の国家に押し上げた人物だ。

また文化を保護し、フランス料理をはじめとする文化大国としてのフランスの礎を作った人物でもあり、自らその時代最高の文化人としても君臨したんだ」

〈ダヴィンチちゃん〉

「その集大成が、この絢爛豪華なヴェルサイユ宮殿というわけだ」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「そんなすごい宮殿のわりに、あっさり中庭に入れたわね」

ジエネット

「ヴェルサイユ宮殿の中庭は、常に開放されているのです。その絶対的な権威を国民に、知らしめるために、です」

マシユ

「この宮殿自体が、太陽王の巨大なショーケース、というわけですか・・・」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「大した自信家ね」

マシユ

「日本の織田信長さんも、完成した安土城を領民に公開していたといいますが」

立香

「信長はお金をとっていたらしいけどね」

ジエネット

「ルイ14世の治世の頃は、宮殿の大半が解放されていて、国民は国王の私生活さえも鑑賞することができました」

ジエネット

「ただルイ14世と違い、ルイ16世とマリー王妃は民衆が生活の場まで入ってくることを嫌い、人々の建物内への侵入はかなり制限されています。通常の方法では、ルイ1

6世やマリー王妃を見ることは難しいでしょう」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「そこでカペー店長の紹介状を使うわけね。大元帥の出征を祝う晩餐会だっけ？」

ジエネット

「はい。大元帥ナポレオンの出征を祝うフーシエ警察大臣主催の晩餐会ですから、必ずルイ16世かマリー王妃が出席するはずですよ。何か手掛かりがつかめればいいのですが……」

<ダヴィンチちゃん>

「フーシエって、ジョセフ・フーシエの事かい？」

ジエネット

「そうです」

<ダヴィンチちゃん>

『ジョセフ・フーシェ。フランス最初の警察大臣にして、史上最高の警察大臣と呼ばれた男』

ジエネット

「はい。その敏腕で、ほとんどの革命家達を逮捕した恐るべき相手です」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「パーティの主題者はだれでもいいけど、王様が出席するパーティに潜り込めるツテを持つているなんて、あのカペー店長って意外とやるわね」

ジエネット

「パリで一番の鍵職人ですから、貴族やお金持ちのとの取引が多くて知り合いが多いのです」

立香

「カペー店長が紹介してくれた協力者の名前は、なんていう人なの？」

ジエネット

「キルシュタイン男爵という方です」

〈ダヴィンチちゃん〉

「はて、聞いたことあるような、無いような名前だね〜」

ジエネット

「少し変わった方ですが、信頼できる方です。とにかく晚餐会場へと向かきましょう」

晩餐会

ヴェルサイユ宮殿 晩餐会場】

マシユ

「凄い。今までいろんな王宮の中をみてきましたが、その中でも特に豪華な内装ですね」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「確かに、どこもかしこも上品で綺麗ね」

ジエネット

「みなさんのおっしゃることは事実ですが、これも市民から巻き上げた税金であることを忘れないでください」

???

「はくい。みなさん楽しんでいる？」

マシユ

「え、ええ。でもこういうところは慣れていなくて」

公寵姫ローズ

「そつか。私の名まえはローズ。今日は大元帥の戦勝をお祝いするパーティだけど、まだ大元帥も王妃様も来られていないから、緊張しないでいいわよ」

マシユ

「あ、はい。ありがとうございます」

ローズ

「後で最高のワインと最上の料理が振舞われるから、思いっきり食べていってね」

マシユ

「は、はい。ごちそうになります」

イケメンの紳士

「ローズ様。是非、次のダンスを私と」

美男子な軍人

「いえいえ。私とダンスを一緒に願います」

美形の貴族

「いやいや、ワシと踊っていただくお約束ですぞ」

公寵姫ローズ

「いや〜ん、モテモテで困っちゃうわ」

特に身なりのよい紳士

「美しいお嬢様、よければ私とダンスを一緒にしていただけませんか？」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「え？ 私」

特に身なりのよい紳士

「は、い」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「や、よ。誰があんたなんかと踊るもんですか！」

マシユ

（さ、さすがジャンヌさん。すごい断り方です・・・）

特に身なりのよい紳士

「それは残念・・・」

公寵姫ローズ

「夕、タレイラン外相閣下。私でよければ、ダンスを一緒にいたしませんか？」

外務大臣タレイラン

「これはこれはローズ嬢。是非に」

〈ダヴィンチちゃん〉

『シャルルⅡモーリス・ド・タレイランⅡペリゴール、〃外交の天才〃としてナポレオン時代を生き抜けた逸材だ。この男まで起用しているのか。しかも外務大臣・・・』

公寵姫ローズ

「じゃあ、みなさんまたね」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「なんか、派手な女だったわね。あれが王様の愛人のローズ公寵妃なわけ？」

マシユ

「王様の公式の愛人、というイメージとは少し違う感じですね」

ジエネット

「ローズ……元々、派手好きだけど気さくなコでしたが、変わってないみたいですよ。幸い、私には気づかなかったみたいですが」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「というか、王様の愛人なのに、男と遊んでいいの?」

〈ダヴィンチちゃん〉

「この時代の男女は、割と開放的だからね」

——む? どうやら主賓の登場だ」

王妃マリー

兵士

「王妃マリー・アントワネット様及び、大元帥ナポレオン閣下のご到着！」

若く美しい貴婦人

険しい表情の軍人

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「あれが、マリー王妃？」

立香

「向こうの男性が、大元帥ナポレオン？」

マシユ

「王妃と大元帥だけで、国王ルイ16世はいないみたいですね」

ナポレオン大元帥（帽子に軍服姿の、険しい顔つきの男）

「王妃陛下、私の出征に際し、このような宴を開催していただいたこと、恐悦至極に存じます」

王妃マリー・アントワネット？（巨乳）

「此度の遠征の武運長久を祈ります」

ナポレオン大元帥

「——御意」

王妃マリー・アントワネット

「皆の者、引き続き宴を楽しみなさい。わたくしは、政務があるので、これにて席を外します」

そういつて、席を立つ王妃と大元帥。再び宴会が再開される。

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「・・・本当に、形式だけの挨拶だったわね」

マシユ

「王妃も大元帥も、お仕事が最優先で、式典なので仕方なく顔だけだしたといった感じでした」

ローズ

「ささ、みなさん宴を再開しましょう！ 金に糸目を付けないで集めた山海の珍味と、最高のワインを、じゃんじゃん飲んでね！」

召使い

「失礼。ジエネット様ご一行ですか？ 別室でキルシュタイン男爵閣下がお待ちです」

<ダヴィンチちゃん>

『キルシュタイン男爵、カペー店長が紹介してくれた協力者さんが呼んでいるみたいだね。ちょうどいい、席をはずそうか』

【宮殿の廊下】

<ダヴィンチちゃん>

『キルシュタイン男爵とやらに会う前に、マリーとナポレオンについて率直な意見を聞かせてくれないか?』

マシユ

「どうといわれましても、遠目でしたから・・・」

ただ、マリーさんの方は私たちが知っているマリーさんと、外見はよく似ている気がしましたか・・・」

立香

「似ているけど雰囲気が違う。女王としての威厳があったね」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「何言っているのよ？ 全然違うじゃない！」

マシユ

「え？」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「胸よ胸！ つて、そんなこと言わせないでよ！」

マシユ

「……確かに、あのマリーさんのお胸は、大変ふくよかで、何というか……」

立香

「巨乳だった」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「だから、ハッキリと巨乳言うなつての！」

マシユ

「つまり、のマリー・アントワネットは偽物ということでしょうか？ 私たちが知っているマリーさんの胸は、えつと・・・さほど大きくなかったので・・・」

〈ダヴィンチちゃん〉

『うーん、それは決定的な証拠とはならないな、そもそも史実のマリー・アントワネットは、ウエスト50cm代でバスト100cmの超グラマラスさんだし。彼女の別の可能性が顕現している可能性はある。』

マリー王妃以外に、何か気づいた点はあるかい？』

マシユ

「国王ルイ16世がいまませんでしたね」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「王様がいない上に、王妃と愛人ローズが同席してるってどうよ？ しかもローズはさらに愛人らしき男たちをはべらせているし、どんだけ乱れているのこの国!？」

<ダヴィンチちゃん>

「ふむ、ナポレオン大元帥の方はどう感じた？」

マシユ

「そちらは、いかにも厳しい軍人といった感じの方でした」

<ダヴィンチちゃん>

「うーん、こちらもナポレオンの軍人としての側面が強く出ている可能性があるから、何ともいえないね」

ジエネット

「あの、私も一つだけ気になった点があります」

<ダヴィンチちゃん>

「なんだい？」

ジエネット

「普通、国王や王妃に対し礼をとる場合、帽子を脱ぐのがマナーですが、大元帥だけは帽子を着用したまま、礼をとっていました」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「そういえばそうだったわね」

<ダヴィンチちゃん>

「ふむふむ、なかなかに興味深い情報をありがとう」

マシユ

「ダヴィンチさんは何か気が付いた点はありますか？」

<ダヴィンチちゃん>

「そうだね。私も一つある。出席者の貴族たちの豪華な衣装はふんだんの金や銀で彩ら

れていたが、あるはずのモノがなかった」

マシユ

「それはなんですか？」

〈ダヴィンチちゃん〉

「宝石だよ。あれだけの貴族なのに、だれも宝石の指輪をしていなかった」

マシユ

「そういえば、ローズさんも真珠のネックレスをしていました」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「マリー王妃の吸血鬼疑惑と、何か理由があるのかしら」

???（角刈り白髪の体格のいいオネエの男）

「そこに気が付くとは、なかなかいいセンスしているわね」

「?!」
マ
シ
ユ

吸血鬼キルシュタイン

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「——敵よ！」

立香

「戦闘準備！」

マシユ

「了解！」

ジエネット

「ちよつと、みなさん落ち着いてください。この方がキルシュタイン男爵です」

キルシュタイン男爵

「もう、ジエネットちゃんそんな古い名前はやめて、カリー・ド・マルシエって呼んでっ

「いっつてるでしょう?」

ジエネット

「は、はあ・・・」

キルシュタイン男爵改めカリー・ド・マルシエ
「皆さんヨロシク。カリー・ド・マルシエです」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「こいつが協力者?」

マシユ

「たしかに、少々変わった人というか・・・」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「変人すぎるでしょ!」

マシユ

「本当に貴族なんですか？」

カリー

「名前に貴族を表す “ド” が入ってるでしょ？」

マシユ

「た、確かに」

カリー・ド・マルシエ

「もう、みんな冷たいわね。ワタシが吸血鬼だからって、イジメてもいいってものじゃないのよ？」

〈ダヴィンチちゃん〉

「吸血鬼！ 本当に吸血鬼なのかい!？」

ジエネット

「はい。なので、ヴェルサイユに潜入してマリー王妃の吸血鬼疑惑についての調査をお願いしていました」

<ダヴィンチちゃん>

『ちよつと待つて！ 吸血鬼キルシュタイン。その名は、データにあつたぞ』

<ダヴィンチちゃん>

『元々とはある死祖の眷属だったが、死祖の討伐後は独立。聖堂教会の埋葬機関によって討伐のため代行者を派遣されるが・・・』

——な、なんだって!?!』

マシユ

「どうしたんですか?」

<ダヴィンチちゃん>

『・・・血が吸えない吸血鬼であることが明らかとなり、聖堂教会から無害であると判断され、討伐対象から外される、なんだこりや!?!』

マシユ

「血が吸えない吸血鬼」

立香

「なんて残念な吸血鬼なんだ」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「吸血鬼のくせに血が吸えないって、どういうこと？」

カリー・ド・マルシエ

「それはあたしの“能力”と関係があるわ。

私の能力は“触れたものの性質をあるモノに変化させる能力”。代償として血は吸えなくなつて吸血鬼としては弱体化してしまつたけどね」

〈ダヴィンチちゃん〉

『触れたものの性質を変化させる能力!? まさしく“錬金術”そのものじゃないか！

で何に変化させることができるんだい？ 金かい？ 宝石かい？』

カリー・ド・マルシエ

「そんな俗物的なものじゃないわ」

<ダヴィンチちゃん>

『じゃあQP？ まさか、伝承結晶だったりして!？』

カリー・ド・マルシエ

「カレーよ」

<ダヴィンチちゃん>

『・・・は？』

カリー・ド・マルシエ

「カレーよ」

<ダヴィンチちゃん>

『……なんだった？』

立香

「カレーって、あの食べるカレー？」

カリー・ド・マルシエ

「そう。そのカレーよ」

<ダヴィンチちゃん>

『……カレー……』

カリー・ド・マルシエ

「なあに、呆けちゃって？」

貴女ひよつとして、カレーを食べたことないの？

やだ、かわいそ〜」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「可哀そうなのはアンタの頭でしょう！」

〈ダヴィンチちゃん〉

『触れたものの性質を変化させる、そんな稀有な能力の対象が……か、カレー……』

立香

「なぜそんな変な能力に？」

カリー・ド・マルシエ

「それはね……」

カリー・ド・マルシエ

「至高の美味、カレーの存在を知ってしまったからよ!!
もう血なんてまずくって吸えたもんじゃなくなっちゃったの」

マシユ

「それで血が吸えなくなっちゃってしまつて」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「吸血鬼として弱体化したわけね」

カリー・ド・マルシエ

「まあ生きるために最小限の血は摂取してるけどね。ちなみに変化させることができるのは『味』だけね。だから、カレー味の水を作ることにはできるけど、水をカレーに変換することはできないわ」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「ますますくだらない能力ね・・・」

怪人カーリー・ド・マルシエ

マシユ

「ま、まあ・・・カーリーさんの能力のお話はこの辺で。

それにカーリーさんは吸血鬼ということですので、マリー王妃の吸血鬼疑惑について、有益な情報を持っておられるかもしれませぬし・・・」

カーリー・ド・マルシエ

「さつそく、カーリー」って、呼んでくれるなんて、なんて素直ない子なんでしょう。マシユちゃんだっけ？ お礼に貴方の全身を極上のカレー味にしてあげよつか？」

マシユ

「え、私の体を、カレー味に、ですか？」

立香

「——ぐくり」

マシユ

「せ、先輩。そんな目でみないでください！　だ、ダメです、体をカレー味になんて」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「気色の悪いことしないで！　まったく、セクハラみたいな事にしか使えない能力ね」

ジエネット

「それで、マリー王妃の真祖疑惑についての調査結果を教えてくださいませんか？　腐っても吸血鬼なのですから、有力な情報を得られたはずですよ」

マシユ

（腐っても）

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

（意外と毒舌ね、このコも）

カーリー・ド・マルシエ

「じゃあまず貴方たちの立てている仮説の検証からしましょうか。

貴方たちは、王妃マリー・アントワネットは強力な吸血鬼で、第二身分の貴族たちは王妃に嘯まれた吸血鬼、つて考えてるんでしょう？」

〈ダヴィンチちゃん〉

『その通りだ。それなら第二身分の“魔導”と呼ばれる異能力や、あの生命力についての理由付けができるからね』

マシユ

「パリの市民から徴収した膨大な血液についても、彼らの食料として説明がつきます」

カーリー・ド・マルシエ

「でも残念。吸血鬼として断言するけど、王妃マリーも第二身分の貴族たちも、誰一人として吸血鬼じゃないわ」

マシユ

「!!」

ジエネット

「それは、本当ですか？」

カリー・ド・マルシエ

「間違いないわ。まず吸血鬼の大本には二種類あるの。一つ目が聖霊が受肉したケースね。もう一つが魔術師が寿命を求めて魔術的に吸血鬼化したケース。根源を指すには、人間の体では時間が足りないからね」

〈ダヴィンチちゃん〉

「人間は与えられた寿命の間で、なすべき事を成せばいい、と私は思うけどね」

カリー・ド・マルシエ

「それは天才の意見ね。でも魔術師という人種は、そうは考えないのよ」

マシユ

「カーリーさんはどちらのケースなんですか？ 聖霊にも魔術師にもみえませんが」

カーリー・ド・マルシエ

「私は力ある吸血鬼に血を与えられて、眷属として吸血鬼化したケースね。」

そしてここでポイントなんだけど、眷属を作り能力を分け与えるためには「血を吸う」「んじやなくて」「血を与える」「必要があるの。」

カーリー・ド・マルシエ

「つまり王妃は数万人の第二身分の貴族を眷属とするために「血を与えている」という事になるわけね。でもそんなのは吸血鬼の中の最高冠位である死祖でも、可能なのが何人かいるかってレベルよ」

カーリー・ド・マルシエ

「そんな最強クラスの死祖がいたら、アタシじゃなくても気が付くし、そもそも埋葬機関が黙ってはいないわ」

〈ダヴィンチちゃん〉

「確かに、死祖討伐は埋葬機関の責務、それに魔術協会に匹敵する力を持つ聖堂教会なら、何らかの形で介入してくることもできるかもしれない」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「じゃあ、あのパリ中から集めた血液は何のためのものよ？」

カリー・ド・マルシエ

「むしろそれが第二身分が吸血鬼ではない決定的な証拠よ。吸血鬼が食料とする血は、生き血でなければ意味がない。ワイン用の樽に詰めて何時間もかけて貴族たちの元に運ぶなんて、論外よ」

マシユ

「な、なるほど」

カリー・ド・マルシエ

「加えて言うと、パリの市民から集めた血は、ヴェルサイユには運ばれていないわ」

ジエネット

「では、どこに？」

カーリー・ド・マルシエ

「さあ、距離的にパリ市内のどこかに“工房”があることは間違いないわ。そこで血液は、あるものと合成される

ここで貴方達が先ほど話していた話題に戻るわね。ヴェルサイユ宮殿にあるはずなのに、無いもの」

<ダヴィンチちゃん>

『そうか宝石!! 宝石と血液、つまり一種の宝石魔術という事か!』

カーリー・ド・マルシエ

「そゆこと。フランス中から集められた宝石は、パリの市民からの血液と合成されて、第二身分達の魔力の源となっているの」

カーリー・ド・マルシエ

「これがその物的証拠。とある貴族から盗んだ宝石だけど、血の匂いと共に魔力を放っているわ。第二身分の貴族たちはこれを体内に宿すことで、魔導の力と生命力を身に着けたというわけ」

マシユ

「体内に宿す、つまり食べてしまうわけですか」

カリー・ド・マルシエ

「その通り。アタシは血の味のする宝石なんて、食べる気しないけどね」

〈ダヴィンチちゃん〉

『しかし、いくら宝石魔術といっても、宝石に一般人の血液をぶっかければいいもんじゃない。高度な魔術の素養と技術が必要になるはずだ』

立香

「もしその秘密があるとすれば——」

マシユ

「それは、『聖杯』の可能性が高いですね」

〈ダヴィンチちゃん〉

『ねえカーリー、王妃の周りに不思議な杯の噂はないかい？』

カーリー・ド・マルシエ

「杯？ そうねえ、無いこともないわよ」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「なんですって!?!」

カーリー・ド・マルシエ

「宝物庫にあるはずだから、今から行ってみる？」

マシユ

「はい、ぜひ」

〈ダヴィンチちゃん〉

『うまくいけば戦わずして聖杯を確保できるね』

カリー・ド・マルシエ

『じゃあついてらっしゃい、こつちよ』

聖杯

【ヴェルサイユ宮殿 陶器の間】

カリー・ド・マルシエ

「ここが、王妃が集めた陶器の間よ」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「ずいぶんと簡単に入れたわね」

カリー・ド・マルシエ

「この部屋の鍵はカペー技師から預かってたからね」

マシユ

「東洋の、日本の陶磁器が多いですね」

〈ダヴィンチちゃん〉

『この時代の王族に、東洋の陶磁器は人気で、王族たちは競って東洋の陶磁器を集めたというね』

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「で、肝心の聖杯はどこなの？」

カリー・ド・マルシエ

「あったわ、あれよ」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「えっ！」

マシユ

「これは、なんというか・・・」

カリー・ド・マルシエが指し示したのは、陶器で作られたミルク入れであった。

人間の乳房を思わせる柔らかな半円形の形をした乳白色の器の先に、サクランボを思わせるピンク色の先端部が取り付けられている。

つまり――

立香

「女の人の、おっぱい型の杯だ！」

マシユ

「せ、先輩、口に出さないでください」

<ダヴィンチちゃん>

『これは……どうみても聖杯じゃないね……』

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「なんなによこれほ！」

カリー・ド・マルシエ

「マリー・アントワネットが自分の乳房を摸って作らせたという器、いわば“性杯”なんちやつて！」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「この国の国民は、みんな馬鹿なの!? 死ぬの！」

マシユ

「なんといいですか・・・」

立香

「乱れているね」

マシユ

「はい。あのマリーさんの残念な側面を知ってしまった気がします」

〈ダヴィンチちゃん〉

『はあ、空振りか。』

結局、ロクなものじゃなかったね」

<ダヴィンチちゃん>

『他に、カリーに聞いておきたいことはないかい?』

ジエネット

「

ジエネット

「最後にひとつだけ、質問がある」

カリー・ド・マルシエ

「なあに、あらたまつたつて?」

ジエネット

「同士ロベスピエールが拘束されている場所について、なにか情報はありますか?」

カリー・ド・マルシエ

「コワイ顔しちやつて？ アナタあの男の恋人？」

ジエネット

「何でもいい、知っている情報を話せ！」

カリー・ド・マルシエ

「ええと、そうねえ・・・」

パリのどこかに幽閉されているって噂なら、聞いたことあるわ。それ以外の情報は持っていないわ。残念ながら」

ジエネット

「く、やはりパリか。しかし、いったいどこなんだ・・・」

マシユ

（なんだか、ジエネットさん口調が違います）

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

（そうね、ずいぶんと感情的になっているわね）

〈ダヴィンチちゃん〉

『とにかく、情報収集は終わりだ。一度パリに戻ろう』

密室の会合

「ヴェルサイユ宮殿のとある一室」

警察大臣フーシエ

「わざわざこのような場所にござり足労いただき、痛み入ります」

王妃マリー・アントワネット(?)

「かまいません。これも公務ですから。それよりも、これで例の計画はうまくいくのかしら」

警察大臣フーシエ

「はい。『連中』は、我々が流した情報に必ず食いつくはずですよ。」

「しかしよろしいのでしょうか？ かような時期に、大元帥をプロシアに出征させて？ 荒事になる可能性もありますが……」

王妃マリー・アントワネット（？）

「問題ありません。その場合は、わたくしができます」

外務大臣タレイラン

「秘密裏にですが、プロシアから講和を求める使者が来ております。シレジアと王室が保有する宝石全てを譲渡するので、遠征を取りやめていただきたいとの事です。御一考していただく価値のある条件だと考えますが・・・」

王妃マリー・アントワネット（？）

「必要ありません。プロシアは必ず完膚なきまで討伐する様に、申し伝えたはずです」

外務大臣タレイラン

「御意」

警察大臣フーシエ

「戦争をするには、〃血〃が足りないかと、大元帥が申ししておりました。パリだけでなく、リヨンか、ウィーンに新たな〃公房〃設置すべきではないでしょうか？」

王妃マリー・アントワネット(?)

「『血』は、パリの市民からのみ採取しなさい。他の地域、特にオーストリア国民の血を採取するなど論外です。必要ならわたくしの名において命令してもかまいません」

警察大臣フーシエ

「それでは、市民の怒りを鎮めるために必要な対策を取らせていただいてもよろしいでしょうか？」

王妃マリー・アントワネット(?)

「貴方に一任します。」

わたくしは政務がありますのでこれで失礼します」

外務大臣タレイラン

「ふう……」

『政務』か、

どうせあの『王子』の元に行かれるのだろうか」

警察大臣フーシエ

「あの『王子』の育児も、立派な政務さ。なにしろ王妃にとっては、唯一の正当を示す存在だからな」

外務大臣タレイラン

「うむ。」

話は変わるが王妃様のプロシア嫌いは筋金入りだな。今度こそ、プロシアは地図から消えるだろう」

警察大臣フーシエ

「王妃様のパリ市民嫌いもですな。所詮、彼女はオーストリア人というなのでしょう」

外務大臣タレイラン

「しかし、これ以上の血税を課せば、市民が暴動を起こす可能性が高のでは？」

警察大臣フーシエ

「仕方ないですな。ガス抜きのために『バラの花』を折るとしますか」

外務大臣タレイラン

「かまわないのかね？ アレは『彼』に対する切札なのだろうか？」

警察大臣フーシエ

「今、『彼』が立たなければもう一生立てないだろう。眠れる獅子か、腑抜けた猫か、それを確かめる一石二鳥といきましょう」

外務大臣タレイラン

「まあいい、万が一の場合でも恨まれるのは君だからね」

警察大臣フーシエ

「ふん、相変わらず性格が悪い。」

ところでパーティの席に潜り込んできたネズミ達と接触していたそうだが？」

外務大臣タレイラン

「ふふふ、無粋な君が主催したパーティの割には華があつたよ。

特にパリで噂の聖魔女ジャンヌダルクは、素晴らしく美しかった。やはり真の美女は、変装しても優美さは隠しようがないものだな」

警察大臣フーシエ

「ふん、生臭坊主め、その場で刺されればよかつたものを」

外務大臣タレイラン

「あれだけの美女に殺されるなら本望だがね。

しかし王妃に忠誠を尽くしながら、彼”の目覚めを待つか。君は噂通りの”革命のカメレオン”だね。彼”が立ったら、その色に染まるつもりなのだろうか？」

警察大臣フーシエ

「共和派の私は、王妃様とは本質的に相いれぬからな、保険は必要だ。

そういう君はどうするつもりかね？」

外務大臣タレイラン

「大使としてロシアに向かうことにするよ。かの地で、祖国の行く末を見守ろうと思う」

警察大臣

「ふん、高みの見物のもりかね？ 帰ってきたときに外相の椅子がなくなっているかもな」

外務大臣タレイラン

「君の方こそ、いつまでも色を変えて生き残れると思わないことだな」

【王子の自室】

マリー王妃

「王子よ、まだ眠っていないかったですか？」

金髪の虚ろな目の少年

「・・・・・・・・」

マリー王妃

「貴方はいずれ、この国の国王、いえ、フランスとオーストリアの未来を担う人物になるのです。そのことを、肝に銘じなければなりません」

金髪の虚ろな目の少年

「……お、かあ、さま……」

マリー王妃

「運命の王子よ。

愚かな母が救えなくとも――

無力な父に見放されても――

貴方には私があります。何も心配することはありません。

「ささ、もう寝る時間です。おやすみなさい」

公寵姫ローズ

【第三身分解放同盟のアジト（ジエネットの酒場）】

ジエネット

「——というわけで、パリのどこかに血液と宝石を用いた魔術工房があるはずですよ。そこを占領、もしくは破壊することができれば、この状況は打破できるはずですよ」

シエイエス

「うむ・・・パリは広いが、協力者に探すように依頼してみよう」

ジエネット

「もうひとつ、やはり同志ロベスピエールはパリのどこかに監禁されているのは確かです。探し出し、一刻も早く救出すべきですよ！ ロベスピエールさえ戻れば、勝ち目はあります」

シエイエス

「ロベスピエール？ あいつはダメだ！」

ジエネット

「そのようなことを言っている場合にはありません！」

シエイエス

「だって怖いものは怖いんだもの。ロベスピエール怖い」（ガクガクブルブル）

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「・・・少なくとも、『革命のモグラ』のアンタよりは頼りになりそうね」

シエイエス

「モグラと言うでない！」

＜ダヴィンチちゃん＞

『しかたのない革命の指導者だね』

カペー店長

「まあ戦力になりそうな大物はほとんどフーシエに逮捕されてしまったからな。大物で逮捕されていないのは、サン||ジエストくらいだし」

シエイエス

「ひいいい!! あいつも怖い!!」

<ダヴィンチちゃん>

『サン||ジエスト。ロベスピエールの懐刀にして、
“革命の死の天使”と言われた人物
だね』

クウニー

「まあサン||ジエストは頭が切れるだけでなく、絶世の美男子ときてるからな。目立つはずなんだが、よほど上手く潜伏しているらしい。あるいはパリから離れているか」

ジエネット

「……………」

マシユ

「それほど優れた方達なら、味方になってほしいという気持ちはわかりますが……」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「ちよつと、その男にこだわりすぎじゃないの？」

ジエネット

「私が同志ロベスピエールの救出を求めるのには、彼の手腕以外にも理由があるのです」

マシユ

「それはなぜですか？」

ジエネット

「同志ロベスピエールには第二身分の『魔導』が効かない特性を持っていたからです」

〈ダヴィンチちゃん〉

『・・・ほう』

ジエネット

「理由はわかりませんが、ロベスピエールは、魔導に対抗する手段を知っていたようです。そのため、彼は魔導ではなく鉄の鎖で拘束され、連行されてしまいました」

〈ダヴィンチちゃん〉

『ふむ、フランス革命の歴史的リーダーだった彼に魔導の耐性があつた・・・確かに興味深い』

コウモリ

（バサバサバサと部屋に侵入）

シエイエス

「なんでこんな町中にコウモリが？ どこから入ってきた？」

カリー・ド・マルシエ（コウモリが変化）

「じゃじゃ〜ん。華麗なる貴族、カリー・ド・マルシエ登場！ カレーなだけに華麗、な
んちゃって」

シエイエス

「コウモリが角刈りの怪人に変化した!? ひいい、怖い！」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「あんだ、何しに来たの？ 引き続きヴェルサイユに潜入しておくって話だったわよね
？」

立香

「コウモリに変化できるんだ。まるで吸血鬼だね」

マシユ

「先輩。カリィさんは吸血鬼ですよ」

カリィ・ド・マルシエ

「つれないわね、もう。ビッグニュースをつかんだから、コウモリに化けて急いで飛んできたっていうのに」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「で、そのビッグニュースって何？」

カリィ・ド・マルシエ

「まずーつ目が、政府が新しい血税をパリ市民に課したわ。それも国王ではなくマリィ王妃の名でね」

カペー店長

「!! 王妃の命令でだど？」

ジエネット

「それは、パリ市民も激昂するだろう。市民に蜂起を呼びかけるチャンスです」

カリー・ド・マルシエ

「もう一つ、ニュースがあるわ。」

公寵姫ローズが、逮捕されたわ」

マシユ

「えっ!?!」

クウニー

「——なん、だと!?!」

カリー・ド・マルシエ

「表向きは王妃暗殺を企て、王妃の座を狙ったというものだから、裁判になったら間違いない死刑ね」

クウニー

「馬鹿な！ あの女は浪費家で無節操だが、分別はわきまえている。王妃の座を狙うなど、ありえない！」

ジエネット

「ちつ、新たな税に対する民衆へのガス抜き、というわけですか」

シエイエス

「市民の羨望と憎悪を一心に受けていた公寵姫を処刑して、鎮静化を計る。マリー王妃、流石に老獪な政治手腕だな」

カペー店長

「そんな・・・信じられん・・・」

王妃が、彼女の名でそんな命令を・・・」

ミシエル

「そうか？ 王妃が公寵姫を切り捨てること自体は、よくある話だと思うが？」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「いいえ、言われてみれば確かにあの女らしくないわね」

マシユ

「はい。私もそう思います。マリーさんとは思えません」

クウニー

「どういうことだ？ 王妃をよく知っているみたいなの口ぶりだな」

マシユ

「知っているというか、なんというか・・・」

〈ダヴィンチちゃん〉

『マリー王妃の人格の一面を知っているからね。彼女は確かに自由奔放な性格だったけど、愛情も憎悪も正面から受け止める人物だった。その結果、市民の怒りを一身に受けてしまったけど』

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「少なくとも、憎悪を誰かに転嫁することはしないわね。たとえどんな形で現界していても、そこは変わらないはずよ」

マシユ

「はい、断言できます」

カペー店長

「……」

ジエネット

「どちらにせよ、新たな血税による市民の不満を逸らされるのはまずい。我々としてはなんとかして阻止したいが……」

シエイエス

「しかし、我々がローズ公寵姫を救出すれば、市民の不満は我々に向けられる恐れがあ

る。〃なぜ市民の味方のはずの第三身分同盟が贅沢三昧の公寵姫を救出するのだ?!〃
となるからね」

カペー店長

「すまない。カルデアの君たちに個人的な頼みがある。

公寵姫ローズを、救い出してほしい」

クウニー

「!? カペー、店長？」

カペー

「彼女が冤罪なのは間違いない。何とかして救い出すべきだ。この通りだ」

クウニー

「お、俺からも頼む。ローズを、あいつを助けてやってくれ！」

シエイエス

「確かに第三市民同盟ではなく、カルデアの君たちなら、万が一関与がバレても市民の支持を失わずに済むが」

ジエネット

「加えて、ローズは公寵姫としてヴェルサイユの中枢にいた人物です。何らかの情報を聞き出せるかもしれません」

マシユ

「先輩、どうしましょう?」

立香

「助けよう」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「……まあそういうと思っていたわ。で、具体的にはどうするの?」

クウニー

「作戦は俺に立てさせてくれ。そういうのは得意だ。

ミシエル、樽を一つ用意してくれ。あと樽いっぱい火薬もだ」

ミシエル

「了解！」

クウニー

「決行は翌朝早朝、馬車でローズがヴェルサイユからパリの牢獄に移送されるところを狙う。場所は、パリのサン・ニケーズ通りだ」

ローズ救出作戦

【翌朝早朝 パリ サン・ニケーズ通り近く】

元公寵姫ローズ

「いや〜！ 王妃様暗殺なんて企ててないわ！ 冤罪よ!!」

兵士A

「うるさい女だな。馬が驚くから馬車の中で静かにしてろ！」

元公寵姫ローズ

「嫌よ！ ギロチンなんていや〜!!」

兵士B

「今までさんざん王宮で贅沢したんだから、あきらめろよ」

元公寵姫ローズ

「やだやだ！ いやー!!」

兵士A

「うるさい女だ。

むう、コウモリか？ こんなパリのど真ん中に」

兵士B

「コウモリなんてほっておけよ」

カリー・ド・マルシエ

「ぼんじゅくる、むっしゅ」

兵士A

「!? コウモリが、怪人に変化した!?!」

カリー・ド・マルシエ

「ふん！」（ポカ）

兵士B

「コウモリが怪人？ お前は何を言っているんだ？」

カリー・ド・マルシエ

「えいー！」（ドス）

兵士B

「ぐふ・・・」

カリー・ド・マルシエ

「ふう。まったく、吸血鬼使いが荒いんだから。

あんた達、早くすましちやいなさいよ」

クウニー

「感謝する。」

カペー店長、この鍵を頼む、パリ随一の鍵職人の腕を見せてくれ」

カペー店長

「任せてくれ。この手の鍵なら、開けられるはずだ。

——よし、開いたぞ」

元公寵姫ローズ

「私を助けてくれるのね、ありがとう。

つてクウニーじゃない！」

クウニー

「話は後だ、ローズ」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「無事救出できたみたいね。護衛の兵士は気絶させたわ」

ミシエル

「もう樽に仕掛けた爆弾が起爆する時間だ。ささとずらかるぞ」

元公寵姫ローズ

「えっ、爆弾?!

つて、うわあああ!」

——爆発音——

兵士C

「爆弾だ! 囚人を乗せた馬車が爆発したぞ!」

将校

「囚人ローズを狙った爆殺事件か?」

おい、お前起きろ! 何があつた?」

兵士A

「コウモリが・・・」

将校

「コウモリがどうした？」

兵士A

「角刈りの怪人に化けました」

将校

「は？」

兵士B

「悪魔だ。あれはコウモリの悪魔だ！」

将校

「お前たちは何を言っているんだ！」

???

「どうしたのかね？」

将校

「こ、これはフーシエ警察大臣、このようなところに」

フーシエ警察大臣

「たまたま近を通りがかっただけさ。それより、どうしたことだ？」

将校

「何者かが、元公寵姫を輸送する馬車を爆破した模様です。ローズの身柄は確認できません、爆死した可能性もありますが、逃げた可能性も・・・」

フーシエ警察大臣

「おそらく公寵姫を憎む過激派市民による犯行だろう。この有様ではローズは爆死したものとみてよからう」

将校

「しかし、そう決まったわけでは……せめて死体の確認をしなければ」

フーシエ警察大臣

「私が爆死したと言うのだから、そうなのだよ。それとも不服でもあるのかね？」

将校

「め、滅相もございません！」

フーシエ警察大臣

「それでよい」

フーシエ警察大臣

（ふん、爆殺で証拠は残さない、か。思ったより良い手際だ。これはまだまだ捨てたものではないかもしれん……）

元公寵姫ローズ

【第三身分解放同盟アジト（ジエネットの酒場）】

クウニー

「ふう。うまくいったな。予想通り、ローズは過激派市民による爆殺によって死亡、と警察は処理したみたいだ」

シエイエス

「我々第三身分解放同盟の関与が疑われていないなら、それでいい」

元公寵姫ローズ

「助けてくれてありがとう」

クウニー

「ふん」

ローズ

「なあに？ 私が結婚破棄したこと、貴方まだ怒っているの？ それとも公寵姫になったことが不満なの？」

クウニー

「知らん」

ミシエル

「へへ、久しぶりだな。ローズちゃん」

ローズ

「ミシエルに、ジエネットも、お久しぶり。解放してくれてありがとう」

ジエネット

「残念ながら、貴女は解放されたわけではありません。我々の“人質”となってもらいます」

ローズ

「ええ!?! なんでなんで?！」

シエイエス

「元公寵姫ローズ、君が国王側の人間だからだよ」

ローズ

「まってまって、ジエネット、私たち友達でしょう?！」

ジエネット

「私にとって、友と呼べる人は一人だけです。残念だが、貴女ではない。それに私は革命家だ。王室に連なるものは、私の敵です」

ローズ

「待ってよ、私だって好きで公寵姫なんてもものになったわけじゃないのよ?！」

ジエネット

「貴女の贅沢のおかげでパリ市民がどれだけ苦しんだか、考えたことがありますか？」

ローズ

「ええ〜？　つまり私つてば助けられたんじゃないやなくて、捕虜として強奪されたつてわけ？　最悪!!」

ねえクウニー、何とか言つてよ」

クウニー

「知らん」

ローズ

「もう、貴方、私が新婚中に浮気してたことまだ怒つてるの？　わかった、貴方からの恋文をみんなの前で朗読して笑いものにしてたことを根に持っているんでしょ？」

マシユ

「……ひどい」

シェイエス

「まあ、本来ならパリ市民によつて裁かれるべきところだが、司法取引といこうではないか。君がヴェルサイユの情報を提供してくれるなら、我々も君の安全は保障しよう。悪い条件ではあるまい」

ローズ

「はい！ 何でも話します!!」

マシユ

「軽い・・・」

カリー・ド・マルシエ

「あつさり裏切つたわね」

ローズ

「だって、私を切り捨てようとしたのは王政側だし、義理立てするいわれはないわ」

ジエネット

「・・・それでは、王政側に関する知つていることをすべて話してもらいましょうか」

シエイエス

「うむ。ではまず貴女が愛人をしていたルイ16世について教えてもらおうか」

ローズ

「ルイ16世について話せつて言われても、無理よ」

シエイエス

「何故だ？ 王政側に対する義理立てかい？」

ローズ

「違うわ。私はルイ16世と会つたことがないもの」

シエイエス

「!? どういうことだ? 君はルイ16世の公寵姫、つまり愛人だろうか? 噂ではルイ16世は君の色香に夢中で、自室から出てこないそうだが」

ローズ

「知らないわよ! そもそもヴェルサイユにルイ16世はいないんだもの。王様の寝室に呼ばれても、いつも一人で寝てたし、そもそもアタシの役割が、ルイ16世が存在しているように周囲に思わせること」ですもの」

ジエネット

「つまり、ルイ16世が酒色におぼれ、自室から出てこないというのは真つ赤なウソということか」

カペー店長

「.....」

シエイエス

「やはり、政治を行っているのは王妃マリーということ間違いなさそうだ」

ロベスピエール救出作戦

ジエネット

「王妃マリーについては何か情報はないか？」

ジョセフ（ローズ）

「それもそんなに詳しくないわ。だって公寵姫が王妃と仲良くしてたらおかしいでしょう？」

マシユ

「魔導に関する情報はありませんか？ 噂でもかまいません」

ジョセフ（ローズ）

「そんなの知らないし、そもそもアタシは『第二身分』じゃないし、使い捨ての公寵姫なんだから。」

「なんだか自分で言ってる悲しくなってきたわ」

<ダヴィンチちゃん>

『やはり魔術の知識の無い彼女からは大した情報は聞き出せないか』

ジエネット

「最後に一つ、同士ロベスピエールについての情報は？　パリのどこに幽閉されているか知っているか？」

ローズ

「そ、そんなこと聞かれたって」

ジエネット

「そんなことはいいい！　噂でもいい。ロベスピエールに関する情報はないのか？」

ジョセフ（ローズ）

「噂レベルでいいのなら・・・」

パリのテンプル塔に収容されている、って話は聞いたことあるけど」

ジエネット

「テンプル塔？　貴様、ウソを言っているのではないな？」

ジョセフ（ローズ）

「ちよつと、首を絞めないで！　う、噂の真偽なんてわかんないわよ！」

カペー店長

「ジエネット君、落ち着き給え」

ジョセフ（ローズ）

「はあ、苦しかった。」

ねえクウニー、ジエネットってあんな激しい性格だったっけ？　なんか口調も荒い

し……」

クウニー

「さあな。革命は人を変えるのだろう。しかしテンプル塔、あの辛気臭い場所か」

ジエネット

「あんなパリのど真ん中にロベスピエールが幽閉されていただと？　馬鹿な、ありえない」

カペー店長

「いや、ありえなくはないよ。あそこは現在は王家管轄の修道院だが、昔は監獄として使われていたこともある。密かに要人を収監するには、適した場所だ」

ジエネット

「同志シエイエス、すぐさま市民を動員し、テンプル塔を襲撃するべきです！」

シエイエス

「ロベスピエール!?　あいつはいかんといつているだろう！　あんな危険人物、むしろずっと監禁されるべきだ」

ジエネット

「……く、この腰抜けが」

シエイエス

「なんと言われようと、市民を動員はできん。敵の罠の可能性もあるしな！」

ジェネット

「・・・クウニー、頼む！」

クウニー

「悪いが警察大臣のフーシエが流した偽情報の可能性もある。あの塔に手を出すのは危険だ」

カペー店長

「・・・では、私が個人的に協力しよう。ロベスピエールは、第三身分の人々にとって必要な人物だと思うからね」

シエイエス

「カペー店長！　ありがとう、心より感謝する」

カペー店長

「とはいえ二人では流石に厳しい。君たちカルデアの方達にも手を貸してもらいたいが」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「どうするの？　そのロベスピエールという男、救出する必要があるの？」

<ダヴィンチちゃん>

『うくん、フランス革命を成功させるには彼の力が欠かせないだろうし、何より彼には“魔導”が効かなかったという点に興味がある。私個人としては是非とも確保したい人材だと考えるが・・・』

立香

「——助けよう」

マシユ

「了解です」

<ダヴィンチちゃん>

『うん、そういうと思ってた』

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「はあ、また要人の救出任務・・・仕方ないわね」

ジェネット

「ありがとう、恩にきる！」

理想の血塗られた右腕

〔テンプル塔最上階〕

拷問官A

「次、火炎魔術による焼却処刑開始」

ロベスピエール

「……全ての人間は、法の下に平等であるべきだ。第二身分が市民を殺しても免責されるなど、あつてはならぬことだ。それはキリスト教の教義にも、理性の光にも反することだ」

拷問官B

「火炎魔導による処刑執行

——効果認められず」

ロベスピエール

「貧しい市民から税を搾り取り、豊かな貴族たちは非課税の特権を有する、貧しい子供が飢え、貴族が食べきれないほどの富を有している。誰が見ても間違っていることは明白だ」

拷問官A

「次、電撃魔導による処刑執行」

ロベスピエール

「度量衡は統一されなければならぬ。国内で尺度の単位が異なるなど、悪徳商人が利するだけだ。地球の大きさを基準とした“メートル法”を導入して国内の単位を統一すれば、いずれ世界中の市民がこの単位を使用する様になり、発祥国である祖国フランスの利益は計り知れない」

拷問官B

「——ダメです。効果、ありません」

拷問官A

「次、斬撃魔導による処刑執行」

ロベスピエール

「“気球”と呼ばれる機械がある。空気より軽いヘリウムを利用して、船を空に浮かせるのだ。これを軍事的に転用すれば、空から敵の陣容を偵察することができる。世界初の航空部隊というわけだ」

拷問官B

「——空飛ぶ船？ そんなことが可能なのか？」

拷問官 A

「貴様、それを使って征服戦争でもするつもりか？」

ロベスピエール

「私は侵略戦争を肯定しない。無用な戦争は、市民の負担となるからだ。だが市民による正当な政府が、外敵からの侵略を受けたならば、あらゆる手段をもってしてそれを撃退しよう」

拷問官 A

「ふん、まがい事を！ 次、重力魔導による圧殺処刑！」

ロベスピエール

「教会への十分の一税は廃止されなければならない。聖職者が、信仰を口実に貧しい市民から過酷な税を取り立てるなど、言語道断で許されざる所業だ」

拷問官 B

「・・・教会への税が不要だというのか？ 信仰を否定するのか？」

ロベスピエール

「私は信仰は否定しない。だがそれは、個人の内なる内面に秘されるものだ。教会の寄付も奉仕も自由に認められるべきだが、強制される税は違う」

拷問官 A

「そいつの言葉に耳を傾けるな！ 次、冷却魔導による凍結処刑！」

拷問官B

「・・・はい」

ロベスピエール

「市民の税負担が軽くなれば、彼らに教育を受けさせることができる。そして国家は学校を設立し、国民に等しく教育を受けさせるべきだ」

拷問官B

「教育？ 俺達の子供は教育を受けられるのか?！」

ロベスピエール

「貴族や聖職者達の財産に課税すれば、そのくらいの資金を集めるのは造作もないことだ。教育を受けた若者達は、自由に職業を選択し、この国の経済や文化を更に発展させるだろう」

拷問官A

「黙れ！ 反逆者が、黙れと言っているのが、聞こえないのか!!！」

ロベスピエール

「ぐふっ!!!」

拷問官B

「先輩、この男はあくまで『魔導』で殺すようにとの命令です。手を出してはいけません！」

拷問官A

「はあはあ・・・わかつている。」

ふん、さつさと処刑すればいいものを、『魔導』に耐性を持つこの男を、わざわざ魔導で処刑しろなどと、面倒な命令なもんだ」

ロベスピエール

「・・・君はなぜ王妃がそのような命令を発したか、考えたことがあるかね？」

拷問官A

「なんだと？」

ロベスピエール

「『魔導』、第二身分と呼ばれる人々のみが使える神秘の力。それが何なのか、そしてなぜ私には効果がないのか？　そしてなぜ王妃は魔導で私を屈服させたがっているか、疑問に思ったことはないかね？」

拷問官A

「黙れ黙れ黙れ黙れ!!!　革命家気取りのテロリストが！　魔導によるものであれ、この俺の拳によるものであれ、お前の死刑は決定事項なのだ」

ロベスピエール

「ゴホゴホっ……ならばその手で今すぐ私を絞め殺すがよい」

拷問官A

「何?!」

ロベスピエール

「それは私の、そして市民の勝利でもある。なぜなら『魔導』なるものの権威が、幻想に過ぎないことを君たち自身が認めたという事になるのだからだ」

拷問官A

「どちらにしろ貴様は死刑だ、死刑なのだ!」

ロベスピエール

「ちなみに私故人としては死刑制度には反対の立場だ。死刑は国家による殺人だからね。」

だが、市民のために必要ならいくらでも残酷となろう。

——なぜなら『恐怖なき美德』は無力だからだ」

拷問官A

「ぐっ……」

拷問官B

(鉄の信念。そして獄中であつて、なんとという恐しい目をする男。これが「理想の血塗られた右腕」と呼ばれた男、マクシミリアン・ロベスピエールか・・・)

拷問官A

「な、なら俺がこの場で殺してやる。なあに、上には「魔導」で処刑したと報告すればいいだけの話だ」

???

「———そのようなこと、わたくしは命じてはおりません」

拷問官B

「!？」

拷問官A

「え！ あなた様がなぜここに？」

???

「貴方たちはその男を残してさがりなさい。フーシエの報告によると、じきにここに客人が来るとの事ですから、わたくし自らがもてなすといたしましょう」

テンプル騎士団と聖杯

「テンプル塔近く」

マシユ

「見回りの衛兵は去りました。確かにただの教会の警備としては、嚴重すぎます」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「にしても堅牢な作りね。本当に教会？」

ジエネット

「無駄話は止めてください。」

カペー店長、鍵はまだ開きませんか？」

カペー店長

「問題ないよ。このタイプの鍵なら開けられる・・・

——開いたぞ」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「鍵屋って本当に便利ね、いい泥棒になれそう」

ジエネット

「よし、急いで塔の中に入るぞ！」

【テンプル塔内部】

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「ずいぶんと古臭い建物ね」

マシユ

「手入れはされているみたいですが、建物自体は随分と昔に建てられたものようですね」

カペー店長

「そうだろうね。何せブルボン王家の歴史より古い、700年も前に建造されたものだからね」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「私の時代より前じゃない、驚いたわね」

カペー店長

「この塔を建造した者達の名は『テンプル騎士団』。十字軍の遠征で名を上げ、国王を圧倒する富と、法皇を凌駕する情報網によってヨーロッパに君臨した者達だ」

カペー店長

「だが、おごれるものも久しからず」というのかな、その力を警戒した時のフランス王が教会と協力し、彼らを異端尋問にかけたうえで財産を没収したのだ」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「私の時と同じじゃない！ まったく王様って連中は！」

カペー店長

「・・・そうだね。そういう意味で、ここに『収監』されるといふのは、運命的なものを感ずる」

マシユ

（カペー店長、なんだか、ずいぶんと悲しそうな眼をされています）

<ダヴィンチちゃん>

『しかしこの内装、ある種の魔術的な技術を念頭に建造されているね』

カペー店長

「ありえる話だ。テンプル騎士団達は、古来より続く『魔術』を秘匿してきた人々であるとされている。そして彼らの空前の繁栄の源となったのは、十字軍遠征でエルサレムのソロモン神殿より発掘した『聖なる杯』だと言われているからね」

マシユ

「聖杯!?!」

立香

「聖杯が、かつてこの塔にあったの!？」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「ちよつと待ちなさいよ。その『聖杯』はいまどこにあるのよ?」

カペー店長

「国王との裏取引で聖堂教会の第八秘蹟会が回収したとも、魔術協会との抗争で破壊されたとも言われているが、何しろ古い話だからね、真相のほどはわからないよ。」

王族に伝えられているのは、テンプル騎士団から没収した財産が、フランス絶対王権の礎となったという事実だけだ」

〈ダヴィンチちゃん〉

「かつて何らかの『聖杯』がここにあったのなら、この時代のここに『聖杯』が現界した可能性は高いね」

ジエネット

「無駄話はやめてください、急げ!」

カペー店長

「そうだね、先を急ごう」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「……ねえ立香、あのカーペー店長って何者？ ただの鍵屋にしては、おかしくない？」

マシユ

「確かに。王宮の晩餐会に出席する貴族と知り合いだったりしますし」

〈ダヴィンチちゃん〉

『魔術協会や聖堂教会の存在を知っているとは、その知識も教養も、只者じゃないね……
鍵職人としての技術は一流だが』

ジエネット

「無駄話はやめてください」

最上階だ。ドアを開けると同時に、一斉に侵入します！」

テンプル塔最上階

【サンプル塔最上階】

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「薄暗くて不衛生な部屋ね。こんなところに人間なんているの？」

マシユ

「待っててください、そこに誰か繋がれています！」

ジエネット

「ロ、ロベスピエール！」

ロベスピエール

「やあ、久しぶりだね、我が同志よ……その姿もなかなか似合っているよ」

ジエネット

「酷い怪我だ。それにこんなに痩せこけて……」

ロベスピエール

「落ち着き給え、我が同志。この傷は一つとして『魔導』によるものではない。それに栄養状態がよくないのは、パリの市民達と同じだからね」

???

「そう。この男の精神は最後まで、『魔導』の権威を受け付けなかった」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「貴女は!？」

その場に立っていたのは、その場の誰もが思わず息をのむほどの、この上なく美しい女性だった。

薄暗く陰湿な塔の中であって、黄金の様に輝くような金髪と、陶器のように透き通るような白い肌

清楚だが地味に堕ちず――

華麗だが派手に至らず――

完璧な調和の取れたドレスと髪飾りは、この女性本来の美しさを、よりいっそう引き立てていた

だが単に美しいだけでない。その空気は、水が張り付くような峻厳さも併せ持っていた。

マシユ

「まさか――王妃マリー・アントワネット!？」

王妃マリー・アントワネット?

「予定時刻ピッタリにここに現れるとは、さすがはフーシエ警察大臣、といったところかしら」

立香

「本物の、マリー？」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「……いいえ、違うわ。貴女はマリー・アントワネットじゃない。貴女の威厳は、王妃というより女王のもの」

マシユ

「はい、外見はとても良く似ていますが、やはり違います」

王妃マリー・アントワネット？

「ほう、あの愚かな娘の事を知っているとでもいうの？」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「そうよ。実物を見て確信したわ。貴女はマリーじゃない。何者？」

ロベスピエール

「それを見破るとは、君達も只者ではないね」

ジエネット

「ロベスピエール、どういうことだ？ この王妃は偽物だというのか？ 偽の王族とい

う事か？」

ロベスピエール

「その問いは半分は正解で、半分は不正解だ。

マリーはマリーでも、マリー・テレジーン。ドイツ語ではマリア・テレジア。ハプスブルク家当主にしてオーストリア帝国皇帝だ」

マシユ

「マリア・テレジア!？」

<ダヴィンチちゃん>

『本名マリア・テレジア・フォン・エスターライヒ。オーストリア帝国全盛期の皇帝にして、唯一の女帝。そしてマリー・アントワネットの実母でもある』

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「マリーの母親……どうりで似ているわけね」

マリア・テレジア

「なるほど、フーシエの言う通り、〃カルデア〃の貴方たちは魔術にも秀でているようですね。」

——ならば、真の神秘の深淵さもまた、理解できるはず」

マシユ

「マリア・テレジアの魔力、上昇していきます!」

<ダヴィンチちゃん>

『何だこの濃密な魔力は!?! 観測器が異常値を出しているぞ!』

<ダヴィンチちゃん>

『観測不能、EX領域の魔力!?! おかしい、あらゆる魔術系統に類似しているが、適合するものは無い。』

まさに魔術の領域外にある “神秘”? 信じられない、これは、まさか——』

マリア・テレジアの元に集約される、おぞましいほど濃密な魔力。

全員が息をのみ、ただただその驚異に目を見開く

気づくべきだったのか? いや、認めるべきだったと言うのか?

第三身分たる市民が一般人、

第二身分たる貴族が魔導士なら、

第一身分たる王族である彼女は——

—— “魔法使い” ——

であると言うことを

魔法使い

<ダヴィンチちゃん>

『——まさか、あり得ない！ 根源の渦に到達した魔術師だと!？』

あり得ない、あり得ない！

魔術師ではないただの王族が、 “ 真理 ” に到達するなんて、どんな歴史であれそんなのあり得ない!』

マリア・テレジア

「女魔術師メイガスよ、それが “ 魔術師 ” に過ぎない貴女達の限界なのです。個人で内なる真理を追求することしかできない貴女達にはたどり着けない領域があるのです」

マリア・テレジア

「我々王族は、国家の権限と臣民達の命を、必要なだけ動員できるのですから」

マリア・テレジア

「それにわたくしには、 “ 聖なる杯 ” の加護さえある」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「あ、あれは、聖杯!？」

立香

「やはり聖杯は、王妃が持っていたのか！」

〈ダヴィンチちゃん〉

『しかし、いくら聖杯とはいえ第三魔法の派生物、そのレプリカに過ぎないものだ。

その聖杯を使って、魔法の域に達するなんて、本末転倒だ。できるはずがない』

マリア・テレジア

「それは、貴方達魔術師が知る『聖杯』の話でしょう？」

かつてこの塔を建設した者たち、テンプル騎士団がエルサレムのソロモン神殿より発掘した『聖杯』は『理想郷の釜』などではない、そんなまがい物ではない本物の、『神の血を受けた杯』なのですから

〈ダヴィンチちゃん〉

『まさか——』

“ 神の子” キリストの血を受けた杯、モノホンの聖遺物!?!』

マシユ

『まさか?!?!』

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「ちよつと、そんなの反則じゃない!!」

<ダヴィンチちゃん>

「それが本当なら、どんな反則も正当化できる。ただの王族を魔法使いにまで昇華することもあるよ」

いや、しかしそんな馬鹿な——」

マシユ

「しかし、あの聖杯の輝き。我々が知っている聖杯とは別次元のもんです！ i

マリア・テレジア

「魔術師なら、魔法の権威に屈しなさい。」

キリスト教徒なら、聖遺物の権威に懺悔なさい。

不可侵の、神聖なる領域を体现する者の権威に、ひれ伏しなさい」

<ダヴィンチちゃん>

『魔力量、さらに増大！ 観測計を振り切った。』

——こりやマジでヤバイよ!!』

マリア・テレジア

「反逆者とそれに与する魔術師達よ。消し炭となり果てるがいい」

マシユ

「宝具展開、皆さん、私の後ろに下がって!!」

<ダヴィンチちゃん>

『ダメだマシユ! 魔法は君の宝具でも防げない、急いで逃げるんだ!!』

マシユ

「そんな時間は――

来ます!!」

立香

「マシユ!」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「くっつ――」

<ダヴィンチちゃん>

『マシユ、みんな!!!』

マシユ

「あれ?」

立香

「生きてる!?!」

???

「マリーの友人に手を上げないでください。義母上様」

マリア・テレジア

「私の『魔法』を凌いだ!？」

——貴方、何者？」

絶対王妃が思わず発したその問いに、彼女自身の中で密かに舌打ちする。

それは、自らの権威の唯一性を否定し、それに比うる存在を認めることに他ならなかったからだ。

革命

カペー店長

「何者、だと？ まさかこのフランスで、我が名を問う者がいようとはね。

だが、あえてその問いに答えよう。我はルイⅡオーギュスト・ブルボン。フランス国王ルイ16世である」

マシユ

「カペーさんが、ルイ16世!？」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「このおっさんが、フランスの王様で、マリー・アントワネットの旦那？」

ルイ16世（カペー店長）

「みんな、黙っていてゴメンね。ボクがフランス王なんだ」

マリア・テレジア

「ルイ……フランス国王である貴方自ら反徒に与するとは、なんと愚かな男なのでしよう」

ルイ16世

「愚かなのは貴女だ。彼らが反徒なら、パリ市民を苦しめる貴女はオーストリアからの侵略者」に過ぎない。さらにマリーの友に手を挙げるなど、もはや捨て置けぬ」

マリア・テレジア

「痴れ事を！」

<ダヴィンチちゃん>

『カペー技師、いやルイ16世の魔力上昇、これは——女帝マリア・テレジアと同規模のもの』

マリア・テレジア

「」

ルイ16世

「」

<ダヴィンチちゃん>

「魔法使い級二体の魔力の激突だ！ 巻き込まれたら一瞬でミンチ肉になっちゃうぞ

!!」

マッシュ

「先輩、私の後ろに下がってください！」

<ダヴィンチちゃん>

『信じられない。ルイ16世もまた、魔法使いとでも言うのか？』

ルイ16世

「ふむ、天才である君でも、間違えることはあるんだね。

ボクは決して『魔法使い』ではない。そしてそれは、義母上も同じ！」

マリア・テレジア

「つくづく愚かな！ わたくしたちの権威を自ら否定するとは」

ルイ16世

「『権威』とは、長年の努力と英知の積み重ねとして完成されるもの。

けっして『偽物』を本物に見せかけることではないのです」

ルイ16世

「カルデアの者達よ。神秘に携わり、多くの英霊と交流を持った君たちならわかるはずだ。

目を凝らし、真実の姿を見たまえ

——ぬん！」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「王妃の光を押し返した?!」

マシユ

「先輩、みてください。『神聖杯』の輝きが！」

立香

「あの輝きは、普通の聖杯のもの!? 『神聖杯』じゃ、ない!?」

<ダヴィンチちゃん>

『魔力計も正常に戻った。計測開始!!』

——王妃の魔力は特大だが、魔法じゃない。繰り返す、王妃は魔法使いなんかじゃないぞー!』

立香

「つまり、『神聖杯』も『魔法』も、真実のものではない!」

ルイ16世

「当然だ。考えてもみたまえ、『神聖杯』が本物なら聖堂教会が黙ってはいないし、『魔法』が真実なら、魔術協会は何としてでも確保してくるだろう」

<ダヴィンチちゃん>

『た、確かに。』

まさか王様にオカルト分野のダメ出しを喰らうことになるとはね!』

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「そんなこと言ってる場合? 来るわよ!」

マリア・テレジア

「・・・我が権威の秘密を知った限りは、もはや生かしてはおけません。

骨すら残さず塵と消えなさい!!」

<ダヴィンチちゃん>

『マリア・テレジアの魔力が再び増大!! 魔法じゃないけど、とてつもない魔力量だ』

衝突する二人の魔力

ルイ16世

「——くっ

残念だ、少しばかり、勝てないみたいだ」

マリア・テレジア

「同じ『第一身分』たる王族のよしみで過分に力を与えてしまいましたが、貴方の力は

私が分け与えたもの。

勝負ありましたね、ルイ」

ルイ16世

「・・・はい、義母上さま。勝負はボクの勝ちですね」

マリア・テレジア

「負け惜しみとは、貴方らしくな——

しまった、ロベスピエールが逃げた!!」

ルイ16世

「ええ、もとより彼らの目的はあの男の救出ですからね」

自らの敗北と、ロベスピエールの脱走がもたらす意味を悟り、この優雅なる女帝の瞳が初めて憎悪の色に染まる。

マリア・テレジア

「——貴方、暴動でも起こすつもり？」

ルイ16世

「いいえ陛下、革命です」

マリア・テレジア

「……ふっ

なんとという愚かな男なのでしょう。自らを処刑した男を、妻を、私の娘を処刑した男を、

この薄暗い監獄塔で、私の孫を虐待死させたあの男を解放するなんて!!」

ルイ16世

「義理母上、それもまた、王たる者の宿命なのです」

マリア・テレジア

「……もはや、貴方と交わす言葉もありません。

誰か、ここへ来なさい!!」

兵士A

「はっ!!」

マリア・テレジア

「プロシア方面に展開している大元帥に、至急帰還命令を！」

ルイ16世

「パリを、戦場になさるおつもりで？」

マリア・テレジア

「話す言葉は無いと言ったはずですが、答えてあげましょう。必要とならば焼き野原にする覚悟です」

太陽王の王冠

——幼く、無力な王がいた。

尽きることのない国内の動乱と

終わることのない国外の戦争。

国王の玉座は不安定で、幼少の王は二度もパリから逃亡を余儀なくされた。

——弱き王を誰も敬わず、

——弱き王を誰も恐れず、

——弱き王を誰も愛さなかった。

わずか4歳で即位した幼い国王に与えられたのは、そんな権威の無い色褪せた王冠

それが神が与えたという王冠だった。

だが彼は絶望し、嘆くことを拒否した。

「神が自らに絶対の王冠を与えないのなら、人の手をもってその王冠を磨き、絶対の域にまで高めよう」

と、その生涯を捧げることが誓ったのだ。

そして彼は政敵を退け、戦争に勝ち、人材を抜擢し、財政を整え、文化を育み、芸術を推奨し、

およそ人間が考え付くあらゆる手法と、在位72年にわたる途方もない年月をかけ、いつしか彼は「太陽王」と称されるまでの存在に昇りつめた。

自らの王冠を至高のものへと磨き上げたのである。

誰もが思わず平伏し、ついには魅了される絶対の権威

その象徴、人が作り上げた絶対性の集大成として建造された人の手による至高の王冠、

その名は

——ヴェルサイユ宮殿——

【第三身分解放同盟のアジト（ジエネットの酒場）】

シエイエス

「君たち、無事に戻ってこれたのか。ロベスピエールが脱走したとパリ市内は凄い騒ぎだ」

ロベスピエール

「久しぶりだね。同志シエイエス」

シエイエス

「ひいひい!!! 生〃ロベスピエール、怖い!!」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「うるさいわね、大きな声出さないで！」

シエイエス

（いや、落ち着け私。よく見たらロベスピエールはボロボロじゃないか。怖くない、これなら怖くないぞ）

シエイエス

「お、驚いたな。本当にロベスピエールを救出してくるとは・・・」

マシユ

「はい、カペー店長、いえルイ16世のおかげです。しかし、代わりにルイ16世が捕まってしまったのですが、大丈夫でしょうか？」

シエイエス

（え？ カペー店長がルイ16世？ そんなの聞いてないぞ）

ロベスピエール

「彼の事なら心配はいらない。命を奪われる可能性は無いからね」

〈ダヴィンチちゃん〉

『なぜ、そう言い切れるんだい?』

ロベスピエール

「王族である王妃は、同じ王族である国王を殺せない。王族の神聖性を、自ら否定することになるからだ」

ロベスピエール

「そして王族の神聖性、その権威が魔導と呼ばれる神秘の力の源でもある。彼女が苦心して作り上げたその権威を否定する愚は侵さないだろう」

マシユ

「魔導の力の源……」

ジエネット

「ロベスピエール、教えてほしい。『魔導』とは何だ? そしてなぜ君には魔導の力が効かないのだ?」

ロベスピエール

「王族と貴族、第一身分と第二身分の権威、それらは神から与えられた絶対のものではなく、人の手によって作り上げたものだ。」

そして魔導とは、ある巨大な権威装置を元に、神秘の技術を応用して王妃が編み上げたものだ」

<ダヴィンチちゃん>

『巨大な権威装置……』

立香

「それは一体何？」

ロベスピエール

「幼少のころに、多くの反乱にさらされた幼き王がいた。後に太陽王と呼ばれることになる彼が人生をかけて作り上げた人工的な威光。太陽王ルイ14の権威の具現化した存在。」

その名はヴェルサイユ宮殿」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「ヴェルサイユ宮殿ですって!？」

<ダヴィンチちゃん>

『そうか、ヴェルサイユ宮殿こそ、ルイ14世が残した権威の集大成にして巨大な宝具、いわば“宮殿宝具”とでも呼ぶべきもの』

マシユ

「しかし、この時代ではルイ14世はすでに亡くなっているはずでは？」

<ダヴィンチちゃん>

『仮に彼が亡くなっていたとしても、その権威は残っているし、本物のヴェルサイユ宮殿は現存している。いわば主役不在だが舞台装置は残っている状態だ』

ロベスピエール

「王妃はヴェルサイユ宮殿に残された権威と、神秘の技術を応用し、その権威を目に見える形で実体化させたのだ」

<ダヴィンチちゃん>

「なるほど、『宮殿宝具』であるヴェルサイユ宮殿の権威と『聖杯』の力を用いれば、第一身分と第二身分の王侯貴族達を、疑似的な魔術師にすることは不可能じゃない』

マシユ

「疑似的な魔術師・・・」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「つまり、第一身分と第二身分が扱う魔導は、人工的に作り上げたパチモンというわけね」

ジエネット

「同志ロベスピエールだけがその権威に屈しなかったため、魔導が効かなかったという」とか」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「フン、あんた達、自称『革命家』とは大違いね」

シエイエス

「ううっ……言葉もない」

ジエネット

「……………」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「しかし、だんだんと腹が立ってきたわ。私の時代の王族も狡猾で嫌な奴らだったけど、ここまでじゃなかったわ。それよりもムカつくのが、偽物の権威にびびって、そのまま搾取されている民衆よ。ほんと馬鹿じゃないの？」

ロベスピエール

「そうだな。民衆はいつの時代も権威に弱い。だが彼らを啓発していくのが未来に生きる我々『革命家』の役割でもある」

ロベスピエール

「かつて民衆は、太陽王とヴェルサイユ宮殿の権威に屈し、その威光に魅了された。だが時がたち、次第に知識を深め、人々はその権威から脱却しはじめた。

それが革命。

人類の歴史の、橋頭堡に必然。

その時計の針は、決して戻してはならない絶対のモノ」
ジエネット

「ならば方法は一つだ。ヴェルサイユ宮殿が彼らの権威の源ならば——」
ジエネット

「それを、徹底的に破壊すればいい」

シエイエス

「なんだと！」

ジエネット

「強風の日を選び、計画的にヴェルサイユ宮殿に放火すれば可能だ」

シエイエス

「は、反対だ！ あれは、フランスの宝でもある！」

ジエネット

「だから何だ？ あれこそブルボン朝の権威の象徴にして、市民から搾取した富の象徴なのだぞ!!」

シエイエス

「なんと言われようと反対だ。それに、ヴェルサイユには召使いや兵士として雇用されている第三身分の者たちもいる。彼らを一緒に焼き殺すことはできない」

ジエネット

「目的のためになら多少の犠牲はやむを得ない！」

シエイエス

「た、多少の犠牲だど!？」

ロベスピエール

「二人とも止めたまえ。確かにヴェルサイユを焼くのも一つの手だが、もう一つ方法がある」

<ダヴィンチちゃん>

『それはなんだい?』

ロベスピエール

「『魔導』を発動するためのエネルギー源として、王妃はパリの住民の血液と、ヨーロッパ中から収奪した宝石を用いていることは知っているだろう?」

<ダヴィンチちゃん>

『血液と宝石を利用した、一種の宝石魔術だと我々は推測している。だが工房の場所がわからなくて、手の打ちようがないんだ』

ロベスピエール

「場所なら私知っている」

マシユ

「?! その場所はいったいどこですか？」

ロベスピエール

「バスチーユ牢獄だ」

ジエネット

「バスチーユ牢獄、あんなパリのど真ん中に、工房があるというのか」

<ダヴィンチちゃん>

「ありうる話だ。パリの中心なら新鮮な血液を集めるのに便利だし、牢獄なら人目も避けられる。おまけに血が流れていても不思議はない」

ジエネット

「ならバスチーユ牢獄を襲撃すべきだ。あそこを抑えれば、勝機はある」

シエイエス

「だがしかし、あそこは元々は王城を守るための要塞として建造されたものだ。現在の戦力で落とすのは不可能だ」

ジエネット

「ならば、まずヴェルサイユを破壊し、彼らの権威の源を断つべきだ」

シエイエス

「ヴェルサイユを焼くのはダメだと言っているだろう！」

クウニー

「おいみんな大変だ!!」

ローズ

「ビッグニュースよ！」

シェイエス

「どうしたんだ血相を変えて？」

クウニー

「国王を名乗る偽物が逮捕されたんだが、なんとそれがカペー店長なんだ！ どういう事だ？」

革命前夜

マシユ

「か、カペー店長は……」

ロベスピエール

「彼は第三身分同盟の同志かね？ 私から話そう」

クウニー

「貴方はロベスピエール。救出に成功していたのか！」

マシユ

「はい。その代わりに、カペーさんが捕まってしまいました」

ロベスピエール

「そしてより重要なことだが、ムツシユ・カペーは国王を名乗る偽物などではない。

彼こそが、本物のルイ16世だ。ヴェルサイユの生活に愛想を尽かして、パリに潜伏していたようだがね」

クウニー

「なんだって!? 嘘みたいだ。カペーのおやつさんがフランス国王……信じられん」

ローズ

「だから言ったでしょ。私はヴェルサイユで国王に会ったことはないって」
クウニー

「・・・だとしたら大変だ。王政は、国王を僭称する不遜な偽物であるカペー店長を、ギロチンにかけて処刑すると宣言しているぞ」

立香

「カペーさんを処刑!?!」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「ちよつと、王妃はルイを処刑できないんじゃないんじやなかったの!?!」

ジエネット

「王族は殺せない。しかし、王族を語る偽物としてなら、処刑できるといふことか?」

ロベスピエール

「いや、ありえない。王妃が王族を殺すはずがない。これは、我々をおびき出すための罠だ」

シエイエス

「つまり見殺しにしろ、と?」

マシユ

「そんな……」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「……」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「——ダメよ！」

マシユ

「!?」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「王族はろくでもない連中ばかりだけど、あの男はまだマシな方よ。それに、手を貸してもらった恩もあるわ。立香、助けに行きましょう」

立香

「——了解、助けにいきます」

マシユ

「はい！」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「処刑が行われる場所と時間は？」

クウニー

「コンコルド広場だ。処刑は、夜明けとともに行われる」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「夜明けとともに！ もうすぐじゃない！ すぐに救出にいかない」と

クウニー

「だが捕らえられている場所がわからない。助けるなら、処刑される直前に、コンコルド広場を襲撃するしかないが……」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「それしかないわね！」

シエイエス

「ちよつと待つてくれ。いくら何でも市民の代表たる我々が国王を救出するというのはどうなんだ？」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「臆病なモグラは黙ってなさい！」

シエイエス

「ひいひいひいひい」

シエイエス

「わ、私はもう家に帰る。どうなっても知らんからな！」

ジエネット

「ふ、中立を決め込んだか。さすがは『革命のモグラ』。用心深いことだな
我々はどうする？　ロベスピエール」

ロベスピエール

「――動員の準備を」

同志市民と、軍の中の協力者のリストは残っているのだろうか？」

ジエネット

「ああ。リストは廃棄したが、全て頭の中に記憶している」

ロベスピエール

「では同志達に武器を持たせ、密かにコンコルド広場周辺に集めてくれ。それから軍にいる協力者にも、極秘で指示を出す」

ジエネット

「明らかに王妃の罠だが、大丈夫なのか？」

ロベスピエール

「ああ、可能性は高くないが、王妃の裏をかく手は残されている」
ジエネット

「可能性は高くない、か。失敗すれば俺も君も終わりだが・・・」

ロベスピエール

「革命で命を落とすのなら、むしろ本望だ」

ジェネット

「わかった。流石は『理想の血塗られた右腕』と呼ばれた男だ。変わっていないな、安心したよ。君と革命に殉ずるなら、『俺』も本望だ」

路地裏の誘い

【路地裏】

シエイエス

「とほほ、ロベスピエールが戻った途端、主導権を奪われてしまった・・・」

シエイエス

「どうしよう、ほとぼりが冷めるまで地下に潜伏するか？　しかしロベスピエール。なんと恐ろしい人物なのだろう」

???

「その通り。彼は危険だ。王妃はさっさと彼を処刑すべきだったのだ」

シエイエス

「だ、誰だ!？」

警察大臣フォーシエ

「久しぶりだね、同志シエイエス殿」

シエイエス

「貴様は、警察大臣フォーシエ！　どうしてここが」

警察大臣フーシエ

「パリで知らぬことなど何も無いよ。もちろん、君たちのアジトの事もね」

シエイエス

「なんだって!？」

「そうか・・・わ、我々は泳がされていたということか?」

警察大臣フーシエ

「臆病で穩健派の貴方が代表なら、色々都合がよかつたのだが、あの男ロベスピエールが舞い戻つた以上、捨て置くことはできない」

シエイエス

「何を思つて私に接触してきたのだ?」

警察大臣フーシエ

「要求は一つだけだ。あの男、ロベスピエールを殺せ。そして民衆の暴発を思いとどまらせるのだ」

シエイエス

「なんだって!？」

シエイエス

「お前を信じると? 王妃に与し、多くの仲間を逮捕したお前を?」

警察大臣フォーシエ

「私が手を抜いたおかげで、君は生き残ることができただろう？ それに今でも私は共和派でね、王妃とは本質的に相いれないのだ」

シエイエス

「私に、革命を裏切れと？」

警察大臣フォーシエ

「むしろ革命を守れと言っている。

理想を掲げる獣達から、崇高なる革命を守るのだ」

シエイエス

「革命を、守る？」

警察大臣フォーシエ

「革命家は理性に生きるといふ。

だが急進的で過激な彼らが理性的だと思えるかね？」

シエイエス

「.....」

警察大臣フォーシエ

「革命家とは、結局のところ、不幸で孤独な存在なのだ」

警察大臣フーシエ

「いかに高い理想を掲げようと、優れた手腕を持つとも、急進的過ぎる改革は多くの流血を生み、民衆を不幸に陥れ、やがては民衆と対立することになる。その未来について私とあなたは一致できるはずだ」

シエイエス

「.....」

警察大臣フーシエ

「貴方と私が手を組んで、穏健なる民衆派がこの国を支配する。それがこの国の民衆のためでもある」

シエイエス

「ふん、今度は私を傀儡に私腹を肥やすつもりなのだろうか？」

警察大臣フーシエ

「否定はしない。民衆の生活の安定の代わりに報酬をもらう。それは当然のことだ。貴方もそう思うだろうか？」

シエイエス

「.....」

警察大臣フーシエ

「では、良き返事を期待している」

警察大臣フォーシエ

「あともう一つだけ忠告しておこう」

シエイエス

「な、なんだ？」

警察大臣フォーシエ

「クウニーと言ったかな？ 彼にも気をつける。お前の手に負える男ではない」

シエイエス

「どういう事だ？」

警察大臣フォーシエ

「まあいい。いずれわかる日が来る」

高潔の人

マクシミリアン・ロベスピエール

——弱者を助けたい——

——市民を守りたい——

——不正を正したい——

そんな思いの炎は、貧しき幼少の頃から、この国の頂点に立ち、最後を迎えたあの日まで

遂には消え去ることは無かった

かつて母に死なれ、父に見捨てられた幼き私は

筆舌しがたい苦難の末、弟妹を養いながら、勉学に励んだ

ついに私は弁護士となり、弱者のために、弁護士として、無償で弁舌を振るうだが、法で弱者を救うには限界はあった。

結局のところ、法が間違っていれば、人々を救うことはできないのだ

不条理と、差別と、不徳

その源にある身分制度と悪法

私は市民達の期待を一身に受けながら三部会に立ち、

悪法そのものを変えようとした

そして王室の頂点にあつて、私と同じく、先進的な考えを持つルイ16世と出会う
それは地獄の玉座に、天使が座していたかのような、有り得ない奇蹟

——友になれたかもしれない

——同志となれたかもしれない

だが、王権に立つルイ16世と

市民に立つ私とが共に歩むことを

歴史は決して許さなかった

国王が優秀で善良であるほど

王政復古派の力は根強いものとなり

繰り広げられる内乱によって、多くの民衆が命を落とした

私は、理想を、革命を守るため、

敬愛してやまなかつた国王さえも

断頭台に送らざるを得なくなる

——恐怖なき理想は無力である——

——理想を守るため、王族を処刑し

——理想を守るため、政敵を処刑し

——理想を守るため、かつての同志さえ処刑した

私の右腕は、いつしか彼らの返り血で、汚れ果てていた

だが、そんな私を

現実生きる市民達は理解せず

遂には、彼らは私を恐れるようになった

“恐怖を行う人”（テロリスト）

それが、私につけられた最後のあだ名

やがて彼らの恐怖と怒りを浴びながら

私もまた、断頭台の露と消えることとなる

だが当時の人々は知りえなかつたろう

——その右腕は、返り血にまみれ果てても——

——その心は、穢れを知らない純白のものであったということ——

断頭台に立つ側になつても、後悔は微塵もない

今は理解されなくとも

未来に、必ず理解される日が来る

——私の孤独は、いつか必ず癒されるのだから——

【あとがき】

私が学生の時には教科書に「ロベスピエールの独裁」と載っており、彼は理想的な独裁者の典型例であると習っていたのですが、最近の資料を読む限りは、軍事面等はカルノーらとの共同統治であり、独裁ではなかった様です

私財を蓄えず、市民に尽くした彼が、皮肉にも恐怖を行う人、テロリストの源になります

断頭台

【翌朝 コンコルド広場】

マシユ（市民に変装中）

（ココがコンコルド広場）

<ダヴィンチちゃん>

（史実でも、多くの王族や革命家達が処刑された場所だね）

市民A

「今日処刑されるのは国王を名乗る偽物だってよ」

市民B

「とんでもない奴だな」

市民C

「王様の名を騙り、贅沢してたんだろぅな」

市民

「どうせ大した奴じゃないさ」

市民D

「パンが値上がりしたのも、きつとそいつのせいだ！ さっさと殺せ」

マシユ（市民に変装中）

「——くっ」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「みんな好き勝手いっちゃってるわね」

マシユ

「・・・はい」

ジャンヌ・ダルク（オルタ） 変装中

「フン、あの男に何の罪があるつてのよ。それにこの民衆の熱気、いったい何なのよ！」

ギロチンマニアの市民

「お嬢ちゃんはこの場所初めてみたいだな。なら教えてやるよ。」

ギロチンの前に、その人間の真価がわかるのさ。立派に振舞っている人間が、命乞い

したり、勇敢に振舞っている男が、小便もらしたり、逆に気弱そうな乙女が堂々と処刑

されたりな」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「聞いてないわよ、だまってなさい！ 今度私に処刑のレクチャーをしたら、ぶつ倒すか

ら」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「民衆つて本当に馬鹿じゃないの？ 権威に屈し、自分では何も考えず、貴族が行う処刑を楽しむなんて、本当に救いようがないわ」

<ダヴィンチちゃん>

（我慢して、みんな。ルイを助け出すまでの辛抱だ。

ん？ 来たみたいだぞ）

市民E

「出てきやがった！」

市民F

「ひゃほー！ さっさと殺せ！」

市民G

「犯罪者に死を！」

ルイ16世

「……………」

市民

「なんかしゃべれー！」

市民

「目を開けろ！ 寝てんじゃねーか？」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「もう我慢できないわ。行くわよ！」

マシユ

「はい！」

<ダヴィンチちゃん>

『ちよつと待つて、様子が変だ！』

市民

「目を開けろ偽物！」

市民

「そうだ、偽王！ 目を開けて、なんかしゃべれ！」

群衆の間から湧き起る無数のヤジ。

それに答えるかのように、ルイ16世はゆつくりと眼を開き、

——その一瞬だけ、まるで時が止まったかのような静寂が訪れた——

堂々たる体格と、威風溢れる立ち振る舞い、

そして凜善と輝く澄み切った瞳は、その場の誰もが予想だにしていな、王者の風格

を兼ね揃えたものだった。

ルイ16世

「私は——」

ルイ16世

「私は罪無くして死ぬ」

民衆

「……」

ルイ16世

「だが、例えそうなたとしても、私は誰も恨まない。私の血をもって、諸君らの血が流れぬように、私は祈りを捧げる」

ルイ16世

「それが、国王たる私の使命だからだ」

民衆

「ザワザワ」

民衆

「(、これは?)」

民衆

「まさか、本物の国王陛下?」

民衆

「そんなバカな？」

民衆

「・・・俺は昔、国王のお姿を拝謁したことがあるが、そっくりだ」

民衆

「国王のパリ視察の時の話か？ それなら俺も知っている。アンリ4世以来の国王の市民視察だと、話題になったものだ」

市民

「俺も軍港の視察に来られた時に、お姿を拝見したぞ。水夫の境遇について、質問された」

市民

「俺はヴェルサイユ宮殿でジャガイモ畑の手入れを命令されたぞ。あと芋もくれた。あの芋のおかげで、家族は冬を越せたんだ」

市民

「本当か？ ジャガイモとか家畜の食い物だろうか？」

市民

「いや、国王もジャガイモを食されているらしいぞ」

民衆

「あの王は本物じゃないのか？」

民衆

「馬鹿な、王妃が本物の国王を処刑するわけないだろう？」

民衆

「だが俺達第三身分には確認のしようがないぞ」

民衆

「しかし、あんな立派な人が、国王以外にいるか？」

ロベスピエール

「——彼が本物であることは、私が保証しよう」

市民

「貴方はまさか!？」

市民

「ロベスピエール議員!？」

宝具共鳴

市民

「ロベスピエール先生！ 脱獄したという噂は本当だったのか！」

ロベスピエール！

「私がかつて、国王の就任の際に、御前で祝辞を述べたことがある。

彼は間違いなく、この国の国王ルイ16世である」

市民

「何だって！」

市民

「信じられない・・・」

市民

「だがあの『清廉の人』ロベスピエールが嘘を言うわけがない」

市民

「本物だ！ ギロチン台にいるのは本物の国王だぞ！」

市民

「おいみんな、あの国王は本物だぞ！」

市民

「ロベスピエールがそういつているんだ。間違いない！」

〈ダヴィンチちゃん〉

（民衆が信じた。すごい）

ジエネット

「さすがはロベスピエール。市民の信頼は微塵たりとも失つてはいないようだ」

市民

「ロベスピエール議員、いったいどういう事だ？ 何が起こっているんだ？」

ロベスピエール

「皆、覚えているか？ かつて市民の誰もが期待した人物の事を!？」

最も啓蒙的で、最も慈悲深い君主の存在を」

ロベスピエール

「革命は誰が始めたのか？ 誰が国王の絶対性を否定したのか？」

フランスの絶対者の名において、王権の絶対性を否定したのは誰だったか？」

民衆

「・・・・・・・・」

ロベスピエール

「困窮した市民か？ 力をつけた資本家か？ 自由主義者の貴族達か？

いや、その誰でもない。

王族の頂点にありながら国民を招集し、新たな時代の先駆けを作ったのは他ならぬ我らが国王

ルイ16世である」

民衆

「そ、そうだ、そうだ！」

民衆

「国王は俺たちの味方だ」

ジエネット

「・・・貴方がこれほど国王を評価していたとは、知りませんでした」

ロベスピエール

「ルイ16世は優れた人物だ。だからこそ、王政派から革命を守るため、私は彼を処刑する必要があったのだ」

ジエネット

「—— “国王であることが、彼の罪” という事ですか」

ルイ16世

「国民よ！ 我が愛しき国民たちよ!!」

民衆

「!!!」

ルイ16世

「私はフランス人民の王として、最後の責務を果たす。

——王権よ、民の声を聞け、三部会カ（エタ・ジエネロ）——

マシユ

「これは、宝具!? 王が民の意見を聞くために招集した『三部会カ』が、ルイ16世の宝具

!」

ジエネット

「——国王自らが、その絶対的権威を否定しただと!?」

シエイエス

「国王が、民の政治参加を認めた!」

市民

「そ、そうだ、政府は、俺たちの意見を聞け!」

市民

「偽物と嘘ついて俺たちの国王を殺そうとしやがったな、許せねえ！」

市民

「国王陛下のお墨付きだぞ！」

市民

「悪いのは王妃とその取り巻きだ！」

ロベスピエール

「——市民達よ、今、王は市民に決定を委ねた。

すなわち、『主権』は我々のものとなったのだ」

市民

「うおおおおおおお！」

ロベスピエール

「私は、市民達の代表として、主権は市民にあることをここに宣言する」

〈ダヴィンチちゃん〉

『ロベスピエールに魔力集中

これは、宝具!?!』

——『革命の理想よ、気高くあれ！（リベルテ・エガリテ・フラテルニテ）』——

マシユ

「リベルテ・エガリテ・フラテルニテ——」

立香

「自由、平等、博愛——」

シェイエス

「なんと簡単で、何と美しいスローガン——」

ジエネット

「——」

<ダヴィンチちゃん>

『フランス革命の理念の具現化。』

「これこそロベスピエールの宝具!？」

「——いや、それだけじゃない!」

<ダヴィンチちゃん>

『ルイ16世の宝具 “三部会” (エタ・ジエネロ) “と、共鳴!?”』

<ダヴィンチちゃん>

『——権威に基づく“魔導”の出力低下を確認!』

パリ、いや、軽くフランス全域を覆う勢いだ。

「これが二つの宝具の共鳴、国王と革命家が、同じ未来を求めた結果なのか?!」

ロベスピエール

「私は主権者である市民の名のもとに、封建的特権と權威の全廢を、
今ここに宣言する！」

ロベスピエール

「——諸君に告げる

これは『革命』である！」

革命問答

市民

「うおおおおお!!」

市民

「革命万歳！ 市民万歳！」

市民

「我らがリーダー、ロベスピエールが復活した今こそ、革命の時だ！」

市民

「革命だ！ 王妃と貴族は我々の主権を奪う篡奪者だ！」

市民

「うおおおおお！」

王大陸軍将校

「な、何をしている！ ロベスピエールは政治犯だ。撃て！」

王大陸軍兵士

「し、しかし……」

王大陸軍將校

「アイツの恐ろしさがわからんのか？」

ええい銃を貸せ！ いいか、銃はこうやって使うんだ！」

ロベスピエール

「うぐー！」

クウニー

「銃火に身をさらして、貴様死ぬ気か!？」

ロベスピエール

「革命家は死を恐れない。運命を恐れない。」

革命家は死してもなお、その意思は生き続ける永遠のものだからだ」

クウニー

「.....」

ロベスピエール

「それに拷問の際につけられた傷が深くてね、元より革命のリーダーは務められそうにない。」

ジェネット、君が私の代わりにリーダーとなれ！」

ジェネット

「私が!？」

ロベスピエール

「君の才能は私に劣らない。君が民衆のリーダーとなるべきだ」

ジエネット

「私には・・・そんな資格はない。ロベスピエール」

ジエネット

「民衆が求めているのは、君だ。それに、私は・・・

——民衆を、愛せない」

ロベスピエール

「・・・」

ジエネット

「私は・・・俺は、君と違って民衆を愛せない。そんな私にリーダーの資格なんかない」

ジエネット

「革命の理想には共鳴しよう。革命家の高潔さには敬意を払おう。」

しかし民衆には愛すべき価値はあるのか？ 我々の人生を捧げる価値はあるのか？

民衆たちは投獄された君を助けようとはせず、現状に甘んじ、だがこの期に及んで、再び君にすがろうとしている」

ジエネット

「第一身分も第二身分も醜い。だが第三身分たる彼らも醜い。」

この世で美しいものがあるとすれば、革命家である君だけだ。私が革命家を目指したのも、そんな貴方と一緒にいたかったからだ」

ロベスピエール

「・・・ジエネット、英雄というのはどうやって生まれるのだと思う？」

ジエネット

「英雄？」

クウニー

「!？」

ロベスピエール

「『英雄』とは、行いによつて生まれるものではない。それを待ち望んだ民衆によつて生み出されるもの。そして人々に語り継がれるもの。いわば、過去に生きる存在」

ロベスピエール

「では我々革命家とは何か？ それは人々の未来の理想に生きる存在。つまりは未来に生きる存在。」

そして現在に生きる民衆たちとは、究極的には相いれず、我々は彼らの現実に押され、

切り捨てられることを宿命づけられている存在」

ジェネット

「そうだ。理想に生きる僕たちは清廉にして孤独、つまり革命家とは孤高の存在だ。

孤高たる革命家は、なぜ民衆に裏切られ、捨てられることを承知で彼らに尽くすのだ？」

ロベスピエール

「確かに我々は清廉にして孤独な存在。

だが、決して孤高ではない。孤独であつても、孤高ではないのだ」

ジェネット

「孤独であつても、孤高ではない？」

ロベスピエール

「未来に生きる我々の理想は、民衆にとつての未来の現実、いずれ民衆が生きる未来の現実。――ゆえに我々は孤高ではない。我々の理想は、いずれ人々が生きる現実なのだか

ら」

ジェネット

「・・・」

シエイエス

「……………」

ロベスピエール

「今の民衆を愛せなくてもよい。未来の民衆を愛すればよい。

今の民衆に愛されなくてもよい。未来の民衆に愛されればよい。

——我々は民衆の、ほんの少し先を歩いているだけなのだ」

ロベスピエール

「ジエネット。再び求める。君が、私に代って民衆の代表となってくれ。智謀も度胸も

弁才も、君は私に劣らない」

ジエネット

「……………ようやく、君が見ているものを、*「俺」*も見れた気がするよ

俺の決意も決まった。君と共に、未来の民衆のために殉じよう」

(おもむろにカツラとドレスを脱ぎ捨てるジエネット)

ジエネット

「聞け！ 我こそは革命家ロベスピエールが腹心にして懐刀。ルイ・アントワーン・レオ

ン・ド・サン＝ジユストである」

革命の女神

ミシエル

「な、んだって！ ジエネットちゃんが、男!?!」

クウニー

「あいつが『革命の死の天使長』こと、サン||ジエストだど?」

サン||ジエスト

「続け人々よ！ 我々の、この国の未来のために！」

民衆

「ロベスピエール！ ロベスピエール！」

サン||ジエスト

「聞け、民衆よ！ この俺の声に耳を傾けろ！」

民衆

「若造は引つ込んでろ！」

サン||ジエスト

「く、俺ではダメなのか？ ロベスピエールのような信頼もカリスマ性は、俺にはないの

か？」

シエイエス

「ならば、私が立とう」

サンⅡジエスト

「シエイエス！」

シエイエス

「先ほどのロベスピエールの話で腹は決まったよ。なあに、若者ばかりに目立たせるわけにはいかないからな」

サンⅡジエスト

「ありがとう、古参の君の声なら、民衆は従うだろう」

シエイエス

「まかせたまえ、革命のモグラ」だって、やるときはやるのさ」

シエイエス

「第三身分の諸君！ 私の声が聞こえるか！

諸君らに問おう！ 第三身分とは何か!？」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「聞きなさい、愚かなる民よ！」

市民

「——あの女性は？」

市民

「まさか噂の聖魔女ジャンヌ・ダルクか？」

市民

「みんな、聖魔女の言葉を聞け！」

シエイエス

「あれ？」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「第三身分とは何!？」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「それは——」

市民

「それは!？」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「〃全て〃よ!!」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「何の努力も犠牲もなく、王妃から魔導の力を与えられて魔導士となる。それが第二身の豚達。そしてその豚の権威に服する貴方たちは、豚以下の存在！」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「立ちなさい！ 豚以下の存在になりたくないのなら、その足で立ちあがりなさい！！ 貴方達の祖先の農民たちでさえ、そのくらいはできたわよ！」

サン＝ジエスト

「そうだ。君たち第三身分こそ、この国の主役なのだ」

市民

「俺たちは——」

市民

「フランス国民だ！」

サン＝ジエスト

「そしてこの国の主権者だ！」

市民

「おおお!! おれ達は豚じゃない！」

市民

「王族も、貴族も、みんな第三身分、つまりフランス国民だ！」

サン＝ジエスト

「聖魔女ジャンヌ・ダルクに続け！」

市民

「聖魔女に続け!!」

ジャンヌ

「集いなさい第三身分の民よ！ この私の御旗の元に」

民衆

「うおおおおお、国民万歳」

シエイエス

「ああ、私の私の名言が・・・私の書籍のタイトルが・・・」

マシユ

「も、もうしわけありません」

シエイエス

「い、いいさ。私は所詮は革命のモグラ。いつの時代も勝利の女神は女性なのだ。そして彼女はそれでも格別に美しい・・・」

バスチーユ陥落

クウニー

「民衆の扇動には成功した。だが目的のルイ16世は、兵士たちが連れて行ってしまつたぞ、どうする?」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「このまま王妃政府をぶつ潰せば、ルイもそのうちでてくるでしょ!」

サン＝ジエスト

「ふふ、違う。ジャンヌ、民衆を鼓舞し、バスチーユ牢獄に誘導してくれ」

クウニー

「あそこを落とす気か!」

サン＝ジエスト

「賽は投げられた。もはや行くしかない」

クウニー

「ちつ、しょうがねえな・・・」

ん!?

サン||ジエスト

「どうした？」

クウニー

「いかん、大砲だ。こつちを向いているぞ！」

サン||ジエスト

「砲弾では民衆の動きは止められない」

クウニー

「馬鹿、あの大砲に込められているのは、砲弾じゃない！」

サン||ジエスト

「なんだと？」

クウニー

「込められているのは、非致死性の釘や針金を込めた散弾だ。

あれが放たれたら、民衆は血の海でパニックになる。混乱した民衆は、下手な敵より恐ろしい。どんな名将でも收拾不可能だ！」

サン||ジエスト

「どうすべきだ？」

クウニー

「狙撃だ。銃を持っている味方に、砲手を狙撃させろ！」

ミシエル

「俺が撃つ。元兵士だから銃の扱いは任せろ」

クウニー

「銃を持っているやつはミシエルを援護、狙いは敵砲兵砲手、急げ！」

ミシエル

「うて！ 砲手に銃撃を集中させろ！」

クウニー

「——よし、何とか防げた」

クウニー

「ミシエル、お前は散兵の司令官として、敵の砲手を最優先で狙撃しろ！」

ミシエル

「おうよ」

クウニー

「民衆は建物を利用して敵に浸透。数の優位を生かして包囲しろ！」

シエイエス

「わ、わかった。任せろ」

クウニー

「サン||ジエスト。君は兵士たちを説得し、武器を持ったままこちらに寝返らせるんだ」

サン||ジエスト

「いい、言われなくてもわかっている」

サン||ジエスト

「兵士諸君、革命に参加せよ！ 君たちの妻や友に銃を向けるな！」

立香

「自分たちは？」

クウニー

「君たちは敵将校を狙え！ 指揮官を失えば兵士は脆い」

マシユ

「はい！」

ミシエル

「騎兵だ！ 敵の騎兵部隊が襲撃してきたぞ！」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「密集して方陣を組みなさい！ 武器を前面に出して槍袂を作るのよ！」

サン||ジエスト

「決して引くな、革命魂を見せつけろ！」

民衆

「うおおおお！」

クウニー

「定石通りだが、やるじゃないか。さすが聖魔女殿」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「ふん、騎兵の防ぎ方なんて中世から変わらないものよ！」

クウニー

「敵騎兵は後退したな・・・」

ちっ！ 後方に大砲。騎兵は時間稼ぎか！」

サン||ジエスト

「砲手よ聞け！ 民衆を撃つな！ 君たちの妻や友人を撃つな！」

クウニー

「間に合わない!!」

——放たれる大砲から飛び出す、無数の釘と針金の散弾——

マシユ

「させません、宝具展開 〃今は遙か理想の城〃（ロード・キャメロット）!!」

民衆

「おおおお!!」

サン||ジエスト

「散弾を、防いだ!？」

ミシエル

「すげえ!!」

クウニー

「信じられん・・・これが具現化した『英雄』の起こす奇跡の力——」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「何ほうけてるの、チャンスよ、全員突撃!!」

サン||ジエスト

「全員、突撃! 乱戦に持ち込め!」

民衆

「革命万歳! 祖国万歳!」

民衆

「いけええええ!」

クウニー

「よし、敵の防衛線が崩れたぞ！」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「このままバスチーユに突入するわよ！ みんな、続きなさい！」

民衆

「おおおおお!!」

ミシエル

「いける、いけるぜ！」

サン＝ジエスト

「だが、城門が閉じられたぞ、どうする？」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「全力でぶちかますわよ！ マスター、力を貸しなさい！」

立香

「了解！」

立香

「令呪をもって命ずる！」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「吼え立てよ、我が憤怒！」（ラ・グロンドメント・デュ・ヘイン）

民衆

「うおおおお!!」

ミシエル

「すげえ、城門をぶっ壊した!!」

クウニー

「これも、英雄の力・・・」

ミシエル

「このまま城内に突っ込むぞ！ 続け!!」

将校

「み、民衆に銃は撃てない。我が部隊は投降する!」

兵士

「俺たちも第三身分だ。革命に合流したい」

クウニー

「よし、兵士達が脱落しだしたぞ」

サン||ジエスト

「おい見ろ。バスチーユに!!」

民衆

「!？」

サン||ジエスト

「・・・白旗が上がった。バスチーユは降伏した、俺たちの勝利だ!!」

ミシエル

「やったぜ!　ざまあみろ」

民衆

「やったぞ!!!」

サン||ジエスト

「革命万歳、市民万歳!　パリは市民のものだ!」

民衆

「おおおおおおお!!」

民衆

「革命万歳!」

クウニー

「・・・危なかった、薄氷の勝利というやつか」

サン＝ジエスト

「クウニー、見事な指揮だった。さすがは士官学校卒なだけある」
クウニー

「敵にされたら嫌なことをしたただけだ」

魔術工房

【パリ某所 警察施設内】

部下A

「フーシエ大臣、バスチーユが陥落しました」

警察大臣フーシエ

「そうか。思ったよりあっさり片付いたな」

部下A

「パリ駐屯の兵士の大半が革命側についた模様です」

警察大臣フーシエ

「ロベスピエールの人気は衰えていなかったという事か。
ルイ16世はどうした？」

部下B

「国王は我々の手の者が捕縛し、確保しております」

警察大臣フーシエ

「彼は密かにヴェルサイユに移す様に」

部下B

「ヴェルサイユにですか？」

閣下は革命側に協力されるのでは？」

警察大臣フーシェ

「まだ『王大陸軍』（ロワ・グランダルメ）とそれを率いる『大元帥』が残っている。王妃が勝つ可能性の方が高い」

警察大臣フーシェ

「最高のカードは、最も高く売れる時に、絶妙のタイミングで切るべきなのだ」

部下

「了解いたしました。国王はヴェルサイユに移送します」

警察大臣フーシェ

「しかしシェイエス、あの革命のモグラめ、私の誘いを断るとは、愚か者め。」

「これで革命政府と最後まで戦う事になってしまった」

警察大臣フーシェ

「歴史は流れは阻止できぬのか、それとも古来よりの権威が上回るのか、しばらくは達観させてもらおうか」

【バスチーユ監獄内部、秘密魔術公房】

マシユ

「先輩、こつちです！ ロベスピエールさんの言つた通り、バスチーユ牢獄の内部に魔術公房がありました」

立香

「・・・これは」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「うげ、凄い量の血液。あの樽に入ったのがすべて血液!?!」

マシユ

「こつちは宝石の山です。すごい・・・」

立香

「魔術工房だけど、思っていたのと違うね」

マシユ

「確かに、工房と言うより工場といった感じですね」

〈ダヴィンチちゃん〉

『ヨーロツパ中から収奪した宝石と、パリ中から集めた生き血。

非効率さを物量で補う

なるほど権力者が魔術を追求しようとするところなるわけか・・・』

<ダヴィンチちゃん>

『ふっふっふ・・・』

だっさ〜い、エレガントさの欠片もない！ 非効率きわまりなくい』

マシユ

「ダヴィンチちゃん？」

<ダヴィンチちゃん>

『誰が魔術師は孤独な陰キャだ！ こんな大規模で大雑把な装置で、真理なんか到達できるもんか、そもそも秘匿する気ナツシングだろ？ 聖杯の力を借りてこの程度？

金と権力で神秘まで買えると思うな、バーカバーカ、オタクなめんな！』

マシユ

『ダヴィンチちゃん、王妃はそこまでは言っていない』

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「まあいいわ。ここを押さえたら、第二身分の連中は、“魔導”の供給源を絶たれる。後はヴェルサイユに進撃するだけね」

???

「平和ボケかしらね、カルデアの諸君！」

マシユ

「!? あ、貴方は？」

立香

「カリー・ド・マルシエ!?!」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「存在自体を忘れてたわ！」

カリー・ド・マルシエ

「この生き血を確保する機会をうかがっていたけど、チャンスが転がり込んできたわね」

立香

「そうか、吸血鬼であるあなたの目的はこの血液！」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「最初から、この公房が狙いだっただけだね！」

マシユ

「でもカリーさんは大量の血液を採取することは不可能のはず」

カリー・ド・マルシエ

「あたしの死徒としての特異能力——」

「超技能力は何だか知っているでしょう?」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「触れた物質の性質に干渉できる超技能力——!」

マシユ

「その能力を使って、血液をカレー味に変えれば?」

カリー・ド・マルシェ

「血液を大量に摂取できるようになれば元の力を取り戻せる。

埋葬機関なんて目じゃないわ、死祖にだって到達してみせる」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「させないわ!!」

マシユ

「はい!!」

立香

「・・・あの、もり上がっているとこ申し訳ないんだけど」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「何よ?!」

立香

「この血、ゲロマズのカレー味がするんだけど」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「は!?!」

マシユ

「せ、先輩。食べたのですか?」

立香

「だって極上のカレー味っていうからつい味見しようかと」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「おなか壊すわよ! 何考えてるの!」

立香

「まあ毒の耐性あるし」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「あつたわねそんな能力、正直忘れてたわ」

立香

「毒はともかく、信じられないくらいいますぐいんだけど・・・」

カリー・ド・マルシエ

「・・・どうやら、失敗みたいね」

マシユ

「どういうことですか？」

カリー・ド・マルシエ

「ワタシの能力では、味を変えるのはまだ難しいのよ。ちよつと味見してみましよう・・・」

カリー・ド・マルシエ

「——まつず!! これは、吸えないわね」

立香&カリー

「おええええええ」

マシユ

「先輩、しっかりしてください！」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「きつたないわね、なんなのよ、この吸血鬼は！」

<ダヴィンチちゃん>

『さすが埋葬機関が“無害”と判断して、放置しているだけのことはある。こいつはほつといいね』

決戦前夜

【パリのとある酒場】

ミシエル

「おお、セント||ジエネット。どうしてあなたはサン||ジエストなの?」

クウニー

「飲みすぎだぞミシエル。せつかくパリ革命政府成立の打ち上げをしようと言っているのに」

ミシエル

「あんなに可愛い娘が、男。それも“死の大天使” サン||ジエストだなんて・・・

うおおおん!」

クウニー

「しかしジエネットは貴族の情報を収集するため、屋敷に頻繁に呼ばれていたみたいだが、どう対応していたのだろうか?」

ミシエル

「しりたくもねーよ、そんなこと! ああ、我が愛しのジエネットは死んだ!」

クウニー

「愛した美少女が、美少年革命家だった。小説の題材としてはイマイチだな」

ミシエル

「あのオカマ野郎！ 男なのに口紅なんかつけやがって！」

クウニー

「ご婦人が男装して革命に参加する例ならテロワーニユ女氏とか何名かいるが、逆は聞いたことが無いな」

ミシエル

「ん、男装の麗人!？」

クウニー

「どうした？」

ミシエル

「そうか、わかったぞ。

セント||ジェネットこそ真の姿で、サン||ジェストは男装の姿、つまりサン||ジェストは男装の麗人」

クウニー

「その発想はなかった」

ミシエル

「そうだ。そうに違いない。あんなにかわいい娘が、男なわけがない。

うおおおおお！ 燃・え・て・き・た！」

兵士達

「ここにいらっしゃいましたか、ミシエルの旦那」

ミシエル

「おお、お前はバスチーユの時に俺の指揮下いた連中じゃないか、どうした？」

兵士達

「革命政府が兵士たちの選挙で将校を選出させているのはご存じでしょう？」

兵士たちの選挙でミシエルの旦那が騎兵旅団長に選出されました。階級も大佐です」

ミシエル

「まじで？ 俺が将校？ しかも騎兵旅団長?! ヒヤッハー！ もう樽屋は廃業だ！」

クウニー

「選挙で将校を選ぶとは、革命家達に軍才は無いな。」

とはいえミシエルが騎兵将校か、これはよい人事だ」

ミシエル

「やったぜ！ おいお前ら、今日はオレのおごりだ。楽しんでいけ」

兵士

「ありがとうございます。ごちそうになります」

兵士

「さすがミシエル大佐！」

ミシエル

「がははは！ 嫁さんはジエネットちゃんで決定だし、人生バラ色だ！」

クウニー

「単純で、幸せな奴だ。」

ん、また誰か来たな」

急使

「ここにいらっしゃいましたか、クウニー様にミシエル大佐。革命政府のサン||ジエスト様と

シエイエス様がお呼びです」

クウニー

「俺をか？」

ミシエル

「おう、さつそくジエネットちゃんが俺をお呼びか！」

クウニー

「嫌な予感がするな……」

【臨時政府官邸執務室旧チユイルニー宮殿謁見の間】

臨時政府副首班サン||ジエスト

「よく来てくれた、クウニー、ミシエル大佐。それにカルデアの諸君」

クウニー

「まあ、来てやったぜ」

立香

「呼ばれたから来ました」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「ヴェルサイユ攻略のための軍隊を編成するまで待機しろ、って言っていたけど、どうしたのよ？」

サン||ジエスト

「ヴェルサイユ攻略どころではない。急報が入った。

ヴェルダン要塞を奪われた」

臨時政府首班シエイエス

「ひいひい、ヴェルダン要塞を奪われただつて？」

クウニー

「なんだと!? ヴェルダン要塞はパリ防衛の要。

あそこは革命政府が真っ先に抑えるべきだと進言したはずだが?」

サン＝ジエスト

「ああ、確かに我々が押さえた。だが、瞬く間に陥落したのだ。

大元帥ナポレオン率いる大陸軍によって」

クウニー

「!?」

シエイエス

「待ってくれ、大陸軍は遠くプロシアだろうか? こんな短期間に戻ってこれるはず

が・・・」

クウニー

「いや、大陸軍ならこの機動は可能だ。そうか、ヴェルダン要塞が落ちたか」

シエイエス

「ヴェルダン要塞からパリの間には要塞は無い。

終わりだ! 大陸軍にパリごと焼き払われ終わりだ!!」

クウニー

クウニー

「——ヴァルミーだ」

サン||ジエスト

「ヴァルミー？ パリ近郊のヴァルミー村の事か？」

クウニー

「ああ、あそこは小高い丘になっていて、周りは湿地帯だ。丘に砲兵を置いて、防衛線を引き。パリを守るにはそれしかない」

サン||ジエスト

「わかった、それで行こう。」

ミシエル大佐、至急騎兵を率い、ヴァルミー村を先に抑えるんだ。後続が来るまで村を維持してくれ」

ミシエル

「了解した、ジェネットちゃん！ 終わったらデートしよう！」

サン||ジエスト

「・・・」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「は？ 男同士でデート？ アイツ何言ってるのよ」

サン||ジエスト

「クウニー、君にも頼みがある」

クウニー

「なんだ？」

サン||ジエスト

「革命軍の参謀長を引き受けてほしい！」

クウニー

「なんだと!? 俺が、参謀長？」

サン||ジエスト

「バスチーユ襲撃の際の君の働きは見事だった。その才能を、役立ててはくれないだろうか？」

クウニー

「.....」

クウニー

「.....悪いが他をあたってくれ。参謀は、柄じゃない」

サン||ジエスト

「では、騎兵指揮官はどうだ？ ミシエルの上官、將軍職を約束しよう」
クウニー

「・・・俺は、乗馬が苦手だ。馬が、怖くてね」

サン||ジエスト

「そんな・・・」

クウニー

「すまんが他をあたってくれ」

サン||ジエスト

「くっ・・・」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「私たちはどうするの？ ヴェルサイユに攻め込むどころじゃなさそうだけど？」

サン||ジエスト

「君たちも、ヴァルミーに行ってほしい。あそこが決戦の地となる」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「まあ、しかたないわね」

立香

「行こう、ヴァルミーに」

「はい！」
マシユ

クウニーとローズ

【臨時政府官邸廊下】

ローズ

「ちよつと待つてよクウニー」

クウニー

「ローズ、いたのか」

ローズ

「参謀長の椅子、どうして蹴ったの？　また逃げるつもり？」

クウニー

「盗み聞きしていたのか」

ローズ

「質問に答えて、クウニー！　貴方には軍隊しかないはずよ？　それとも三流の小説家

で終わるつもり？」

クウニー

「ふん、新婚で俺を裏切った癖に、厳しいことをいうな。まだ女房気取りなのか？」

ローズ

「私は貴方を裏切ったわ。でも先に私を裏切ったのは貴方よ！」

クウニー

「遠征中に愛人をつくって遊んでいたのは君だろうか？ 裏切ったのは君だ」

ローズ

「いいえ、あなたよ。貴方は自分自身を、運命を裏切ったのよ。私はただの口実」

クウニー

「……」

ローズ

「昔の貴方は尊大で傲慢で自信家で、風采の上がらない貧乏軍人のくせに目だけはギラギラひかかって、底知れぬ可能性を感じさせた男だったわ。」

私は貴方の可能性に賭けたの。私を“女王以上の存在”にしてくれる男と見込んでね」

クウニー

「昔、君が受けた占い師の予言か？ 君を“女王以上の存在”にしてくれるというとかいう」

ローズ

「そうよ。貴方に賭けた私を、貴方は裏切った。死んだ目をしたただの負け犬になって、帰ってきたの」

クウニー

「・・・それで、今度は国王の公寵姫になったのか」

ローズ

「ええ、公寵姫は“女王以上の存在”だもの。もつともルイ16世は不在で、あたしはただのガス抜きのための人形だったけどね」

クウニー

「フン、野心家なことだ。だったら今度は大元帥ナポレオンとやらの愛人にでもなったらどうだ?」

ローズ

「バカ言わないで!」

あとと言つとくけど、私も革命軍に志願したから」

クウニー

「なんだと?」

ローズ

「革命政府のお偉方に顔を売るチャンスだからね」

クウニー

「馬鹿な？ ヴアルミーの戦いは負けるぞ!? あれは勝てない戦いだ」

ローズ

「軍に志願でもしないと元公寵姫である私が、パリで生きていく場所なんてないの」

クウニー

「・・・ならばローズ、俺と一緒に逃げよう！ パリから逃げればなんとでもなる！」

ローズ

「嫌よ。負け犬の貴方との貧乏逃亡生活なんてまっぴらよ！」

クウニー

「くっ・・・」

ローズ

「可哀そうな人。負け犬の貴方は、いつまでもくすぶっているがいいわ

さよなら、もう会うこともないでしょうけど」

クウニー

「・・・さて！ 俺も軍に志願する」

ローズ

「クウニー！」

クウニー

「ただし、砲兵指揮官だ。その権限で、君を砲兵部隊に配属する。軍隊に所属するならば、上官の命令には従え！」

ローズ

「クウニー、貴方が参加するならきつと勝てるわ！」

クウニー

「フン、俺一人で『奇蹟』が起こるなら苦勞はない。だがやれるだけの事はやってみよう」

軍神の威光

〈??の回想〉

「——神は死んだ」

フランス革命の人民の熱狂の中で、私もそう叫んだ。

神の名のもとに主権を独占していた国王を処刑し、幼い共和国は産声をあげた。

だが新たな共和国の誕生を、列強は許さなかった。

ヨーロッパ全土に及ぶ大同盟が結成され、列強は一斉に祖国に侵攻したのだ。

貴族出身の将校の大半が亡命したこともあって、私は人民の軍を率いる将校として戦地を駆け巡った。

訓練も、装備も未熟な新設の軍を率い、列強の常備軍に挑む。

泥をすすり、血で血を洗う様な苦戦に次ぐ苦戦。

歴戦の中で、私の力もついに尽きた。

血の池の中で、最後の時を覚悟する。

祈るべきか？

だが神は革命で死んだ。ならもはや、祈るべき存在はいない。

神が起こすという奇跡もない。

——はずだった。

神は死んだ。

——だが、軍神はいた。

数え切れぬほどの敵、絶望的な逆境のなかで、それでも奇跡を起こし続ける軍神が――

数え切れぬほどの奇跡と栄光の結果、軍神は皇帝となった。

神によって与えられた王位ではなく、選挙で選ばれた皇帝に

王政と共和制、その中間に位置する共和国の皇帝になったのだ。

“大陸軍”（グランダルメ）

皇帝がそう名付けた最強の軍を率い、今度は我々がヨーロッパを席卷する。

かつて伝説で語られた英雄達の様に、私も元帥の一人として、皇帝による伝説の一部となる。

最強を誇った大陸軍、その中にあってなお不敗の軍団、私が率いた軍団はそう呼ばれた。

——皇帝は敗れた。

敵に敗れたのではない。常勝の大陸軍60万を壊滅させたのは、ロシアの冬だった。だが諸外国はこの隙を見逃さなかった。

ヨーロッパ全土にわたる大同盟が結成され、100万を超える敵が、祖国に押し寄せた。

疲れ果てた兵を鼓舞し、なおも奇跡を起こし続ける皇帝。

だが奮迅むなしく、皇帝不在の中パリは陥落した。

敵に敗れたのではない。愚かなる部下たちが、皇帝を裏切ったのだ。

私は悔やんだ。

私がお傍にいれば、パリが陥落する等という事は無かつたはずだ、と。

皇帝の翼は折れなかった。

軍と国民の熱狂的な支持の元に、不死鳥の様によみがえつたのだ。

私は今度こそお側で戦うことを望んだ。たとえ敗北しようとも

だが今度はパリの死守を命じられた。安心してパリを任せられる部下が、他にいなかったという理由で

——ワートルローで、軍神は敗れた。

皆は言った。勝っていたはずの戦いで皇帝が敗北したのは、味方元帥達の失態によるものだ。

だが、私は気づいていた。

かつて軍神と呼ばれ、敵味方を問わず、軍人ならだれもが畏敬した皇帝。その才覚はついには枯れ果て、過去のモノになってしまったのだということ。

こみ上げてきたのは耐えようのない虚無感。

それはいつの日か黒く染まり、熱を帯び、どす黒い感情へと変化を遂げていった。

——私がこの手で皇帝を殺したかった——

——朽ちた軍神に代って、私が皇帝ナポレオン・ボナパルトに取って代わるべきだったのだ——

ヴァルミーの戦い

「パリ最終防衛線バルミー」

革命軍参謀

「味方正面、押されています。すでにヴァルミー丘の付近まで敵先方が襲来中」

サン＝ジエスト

「司令部より歩兵一個連隊を増援に送る。持ちこたえるんだ」

革命軍参謀

「第二師団より急報、師団長が戦死したとの模様！」

シエイエス

「りよ、旅団長に継がせろ！」

革命軍参謀

「第7旅団長は旅団ごと包囲されつつあります！」

クウニー

「第三師団に送るはずだった一個連隊を第二師団にまわせ！ 正面はおとりだ」

シエイエス

「し、しかし……」

クウニー

「第三師団長は優秀だ。独力で持ちこたえる。増援の代わりに砲兵支援をくれてやる」

シエイエス

「わ、わかった」

サン||ジエスト

「聞こえるか大陸軍の兵士達よ！ 同胞に銃を向けるのをやめろ！ 革命に参加するんだ！」

大陸軍兵士

「

サン||ジエスト

「ダメだ、まるで効果がない」

シエイエス

「大陸軍の将兵は、ナポレオン個人に忠誠を誓っている。説得は不可能だ！」

クウニー

「……」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「あきらめないで、男でしょう!？」

サン＝ジエスト

「敵の砲撃だ！ 分散しろ、固まっていると砲撃の餌食だぞ！」

クウニー

「ダメだ。方陣を維持しろ！ この砲撃は準備砲撃だ、すぐに敵騎兵が突撃してくるぞ！ 砲撃は、こつちの砲撃で黙らせる！」

ミシエル

「敵騎兵は俺が迎撃する、騎兵部隊はオレに続け」

騎兵

「おおおおお!!」

参謀

「右翼、崩壊寸前！ 左翼も包囲されつつあります！」

サン＝ジエスト

「さすが名将ナポレオン率いる大陸軍、悔しいが見事な指揮だ」

クウニー

「・・・確かに優れた指揮だ。だが、指揮官は誰だ？」

伝令

「敵騎兵撃退に成功、しかしミシエル大佐負傷！」

クウニー

「なんだと!」

クウニー

「——くつつ、シエイエス指令、撤退だ。もう戦線を維持できない」

シエイエス

「………」

クウニー

「シエイエス司令！ 我々の負けだ！ 戦線が崩壊する前に、パリに撤退するんだ」

サン||ジエスト

「まだだ。まだ負けたわけではない」

シエイエス司令

「……そうだ。まだ、負けてない」

クウニー

「なんだと!?!」

ローズ

「あきらめないで！ 奇跡は、必ず起こるわ。それは私たちの手で呼び起こすもの」

クウニー

「ローズ！」

クウニー

「何を言っているんだ？ この戦いに勝つのは不可能だ！ 撤退するべきだ！」

サン||ジエスト

「革命を守れ！ 共和国を守るんだ。諸君らの仲間と家族を、侵略者から守るんだ」

兵士

「国民万歳！」

兵士

「革命万歳！ 祖国万歳！」

クウニー

「崩壊してもおかしくない戦況。なのになぜ誰も逃げ出さない？」

クウニー

「俺がおかしいのか？ おかしいのはこいつらなのか？」

クウニー

「なんだこの空気は？ なんだこの奇妙な時間は？ 俺だけが時代から隔離されたよう

な・・・

——いや、俺はこの瞬間を知っている！」

——英雄つてのは、行いによって生まれるものではない——

——そいつを待ち望んだ民衆によって生み出されるもんだ——

クウニー

「彼らが待ち望んでいるのは、奇蹟を起こすという『英雄』

不可能を可能にする男!？」

クウニー

「——今が、運命の刻!？」

クウニー

「再び訪れたのか、この俺に?」

クウニーの頬を、戦場の乾いた風が駆け抜けた。

勝利の女神

〈??の回想〉

——運命の刻というものがある——

全ての因果、全ての罪から解き放たれた聖なる時間

天から叩きつけられた稲妻の様な直感と、込み上げてくる熱風のような高揚に身を任せ

理性も、恐怖も、打算さえもかなぐり捨て

なおも自らの天命を信じ、その命を投げ出す運命の瞬間が、英雄を志す者には必ず降りかかる

だがしかし、身を運命に差し出した殆どの者たちの命を、歴史は無情にも刈り取っていく

英雄にあこがれた者達、その無数の屍の跡

その上に立つ、奇跡を体現した“何者か”

「——それでいい。“何者か”になれない人生なら、失っても構わない」

軍人を目指した幼少の頃より、俺はそう固く信じていた——はずだった

——結局のところ、俺は橋を渡れなかった。

飛び交う弾薬、疲れ切った味方、必死の敵が守るロデイ橋

その橋を突破するためオレはその身を運命に投げ出せなかった。

司令官という理性が、直感を妨げ

銃弾の恐怖が、高揚を打ち消し

既に十分な戦果をあげてきたという打算が、勇気を打ち消した

そして新婚という事実が、俺に戦場から逃げ出す口実を与えた。

運命の女神に二度目は無い

彼女は俺の懐から去った。もう戻ることもない

“何者か”になれなかった俺は、ただ無為に生き、慰めにつまらない小説を書く日々。

だが願いが一つだけ叶うなら、運命の女神よ。

もう一度だけ、この命を投げ出す運命の瞬間を与えたまわんことを——

ローズ

「ねえクウニー、最後に教えてあげる。

私がないで国王の公寵姫になったのかを・・・」

クウニー

「!?」

ローズ

「王様の愛人になって貴方を再び司令官として推挙するためよ！」

———そうか、運命の女神は、去つてなどいなかったのだ———

ローズ

「あなたに、平凡な人生などない。そんな安穩は許さない。『何者か』になるか、なれずに死ぬか。そして『何者か』になつたならば、私はこの人生の全てを、貴方に捧げて尽くしましょう」

———彼女はずつと俺の側で、微笑んでいたのだ———

彼女の笑顔は、何より気高く神々しいものに見えた。

砲煙にまみれようが、他の男に抱かれようが、その美しさは決して汚れない不変のもの
の

彼女の名は知っている。

君の名は、我が勝利の女神、ジョセフィーヌ・ローズ

そして俺の名は———

あとかぎ

ジョセフイーヌは、男性名のジョセフの女性名です。

革命で夫を失った二人の子連れの未亡人でしたが、その美貌と才能で時の権力者の愛人となり、その後ナポレオンに乗り換えて皇后の地位を得た才女

なお息子も軍人として優秀で、猛者ぞろいの元帥たちに引けを取りませんでした

軍神復活

兵士達

「おおおおおおお!!」

マシユ

「歓声!?!」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「何が起つたの?」

クウニー（?）

「民衆よ、兵士達よ、その手に銃を取れ。この国の主権、それは諸君らの掌にある!」

クウニー（?）

「国のために、仲間のために、愛する者のために、傷つき弾尽きてなお戦うお前たちの強さを——」

そしてこの天才（オレ）に率いられたお前たちの強さを、ヨーロッパ中に知らしめるのだ!

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト（クウニー）

「お前らこそ、我が栄光ある大陸軍。

そしてオレこそは、共和国の皇帝ナポレオン・ボナパルトだ！」

兵士達

「皇帝?!」

兵士達

「まさか!? 本物?!」

兵士達

「本物だ。本物の皇帝ナポレオンだ」

兵士達

「皇帝、俺たちの皇帝だ！」

兵士達

「おいみんな皇帝だ、俺たちの指揮を執っているのは皇帝だぞ！」

兵士達

「大陸軍万歳！」

兵士達

「祖国に勝利を！ 皇帝万歳！」

兵士達

「指揮官は皇帝！ 勝てる、きつと勝てるぞ！」

マッシュ

「クウニーさんが・・・」

立香

「ナポレオン・ボナパルト!?!」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「そうだ。俺こそ共和国の皇帝、ナポレオン・ボナパルト。誰かが期待する限り、誰かが
“もしも”と願う限り、そのすべてに応えてみせる男だ」

共和国皇后ジョセフィーヌ・ローズ（ローズ）

「皇帝だけじゃないわ。私もいるわよ！」

兵士

「凄い、ジョセフィーヌ皇后もいるぞ！」

兵士

「皇帝の幸運の女神だ」

兵士

「ばあさん万歳！」

共和国皇后ジョセフィーヌ・ローズ

「うっさい、せつかく若返ったのにヒトをばあさん呼ぶな！ そのあだ名禁止!!」
マシユ

「ローズさんが、皇后ジョセフィーヌ・ローズ?!」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「ちよつと待つてよ！ じゃあ私たちが今戦っているのは誰？」

立香

「敵も大元帥ナポレオンなんでしょ？」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「馬鹿野郎！ 大元帥だが大將軍だか知らんが、この俺がそんなものに収まる器だと思ってるのか？ ローマ法王に与えられる王冠すら要らん。この俺に相応しい称号があるとするれば、ヨーロッパの王、大歐王グレート・ヨーロッパくらいを持つてこい！」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「つまりあつちは偽物つてことね！ マリー王妃と同じく」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「そういうこつた。」

起きろ！ ミシエル！ 負傷なんかしている場合か！」

ミシエル

「さ、皇帝?」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「お前は馬鹿の樽屋じゃねえ! 猛者ぞろいの大陸軍にあつて、なお勇者の中の勇者と称された男、ミシエル・ネイ元帥だ!」

ミシエル

「!?」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「あの地獄のロシア遠征でただ一人心折れなかった不死身の男が、これくらいのケガで寝てる場合か!」

ミシエル・ネイ元帥

「お、思い出した! 俺は、大陸軍元帥、ミシエル・ネイ。

うひよおおおお!」

兵士

「ネイ元帥だ!」

兵士

「大陸軍一の勇者、ミシエル・ネイ元帥だ!」

兵士

「ネイの兄貴だ！」

マシユ

「一瞬にして兵士達の士気があがりました」

立香

「これは、勝てるかも・・・」

ミシエル・ネイ元帥

「勝てるかも、じゃなくて、勝つちまうんだよ。あいつはな」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「戦いは最後の5分間にある。まだ負けてない」

立香

「はい」

ミシエル・ネイ元帥

「勝つぞおおおおおお!!」

兵士達

「うおおおおおお!!」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「」

味方の歓声の中で、ナポレオンは静かに目を閉じ、黙考する。

——軍事史では19世紀前半を“ナポレオンの時代”という。

あまたの英雄の中でも、個人の名が冠された時代区分を有するのは、唯一人、彼だけである。

“天才”

そう称される男の限界まで研ぎ澄まされた直感と——

芸術の域にまで編み上げられた軍略——

絶頂と奈落の底の全てを経験した軍歴。

その全てを動員し、

思考はこの戦場に顕現しうる、無限に近い可能性の中を

——光速で駆け巡る——

時間としてはわずか数秒の瞠目

だがそれで十分、

——彼はついに、細い、糸のようなわずかな可能性さえ手繰り寄せたのだ——

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「——よし、作戦を伝える。」

本隊は、現時刻をもってこのヴァルミー丘を放棄する」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「結局逃げるわけ？」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「逃げるんじゃない。丘をあえて敵に取らせるんだ。

ネイ、お前は左翼後方で残った騎兵部隊を臨時で再編しろ！ 大至急でだ」

ミシエル・ネイ元帥

「——まさか、アウステルリッツ!?!」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「そうだ。あの戦争芸術の傑作を再現する。

オレ率いる本隊は丘を捨てて、右翼後方の沼地に下がる。ジョセフィーヌ、お前は俺が本隊にいることを敵味方に派手に宣伝しろ！」

共和国皇后ジョセフィーヌ・ローズ

「わかったわ」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「ネイ、お前はこの丘を占領した敵が追撃に移った瞬間に、左翼後方から丘を奪い返せ！ 伸びきった敵の側面を突いて敵を分断するんだ！」

ミシエル・ネイ元帥

「だがアウステルリッツの時は朝から発生した霧を利用して接近したが、今度はどうするつもりだ？」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「安心しろ、霧の代わりになるものを用意する。できるな？」

ミシエル・ネイ元帥

「当たり前だ。スルト元帥（パン屋）にできて俺（樽屋）にできないわけがねえ。そつちこそ、後退したまま敗走するんじゃないぞ？」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「馬鹿野郎！ あのダヴー元帥（ハゲ）にできて、オレにできないわけ無いだろう？」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「立香、お前たちカルデアの一行はネイと同行しろ！ 馬には乗れるな？」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「中世の騎士をなめないで！」

乗馬はアンタよりよっぽどうまいわよ」

マッシュ

「私が馬の手綱を取ります。先輩は私の後ろに乗ってください」

立香

「わかった、マシユ」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「とつとと終わらせるわよ！」

皇帝の采配

【ヴァルミー丘後方 共和国皇帝ナポレオン本隊】

大陸軍兵士

「敵、想定通り我々が放棄したバルミー丘を占領！」

大陸軍兵士

「こちら向かってきます。数およそ3万！」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「ヴァルミー丘の敵兵力はどうだ？」

大陸軍兵士

「大半が丘を下りこちらに向かったため、少数の模様です」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「フン、敵は勝った気のような。だが勝つのは俺たちだ」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「聞け！ 大陸軍の兵士諸君！ 逃げるフリは終わりだ。この沼地で敵を迎え撃つ。敵の数は3万、我が軍の4倍だ！」

兵士

「4倍・・・」

兵士

「・・・か、勝てるのか？」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「たった4倍の敵しか用意できなくて、諸君らにすまないと思っている。『張り合い』が無くてすまない」と

兵士

「!？」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「諸君、聞きたまえ！ この日この場において、諸君らを臨時の『皇帝親衛隊』とする！」

兵士

「俺たちが『皇帝親衛隊』!？」

兵士

「信じられない。夢みたいだ」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「そうだ。ヨーロッパを席卷した大陸軍の中でも最強の、俺直属の精鋭部隊！ 地上最強の軍団だ！」

皇帝親衛隊兵士

「うおおおおお!!」

皇帝親衛隊兵士

「やった!!」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「——だがすまないな、〃皇帝親衛隊〃の諸君！ 敵を〃わずか4倍〃しか用意できなくて。このくらいの兵力差で勝ったくらいでは、皇帝親衛隊の栄光ある名に傷がつきかねない」

皇帝親衛隊兵士

皇帝親衛隊兵士

「は・・・はは、確かにたった4倍の敵とは、俺たちも甘く見られたものだ！」

皇帝親衛隊兵士

「そうだそうだ！」

皇帝親衛隊兵士

「確かに、その3倍は欲しいぜ・・・」

皇帝親衛隊兵士

「いや、そりやちよつと多すぎるだろ」

皇帝親衛隊兵士

「そんなことない。かつて見た伝説の古参親衛隊は、そのくらい強かった」

皇帝親衛隊兵士

「しかも皇帝が直接指揮するんだ。負けるわけがない」

皇帝親衛隊兵士

「そうだ！ “皇帝親衛隊”の荣誉に傷をつけるな！」

皇帝親衛隊兵士

「やるぞおおおお！」

皇帝親衛隊兵士

「うおおおおおお！！」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「お前たちは、皇帝親衛隊！」

栄光も苦難も俺と共にあり、ワートルローの地で俺を守るために最後の一人まで戦い散った男達、その伝統を継ぐ者達」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「——諸君らに命ずる。ネイが敵に突撃するまでの時間を稼ぐ！
今こそ皇帝親衛隊の力を見せつける時！」

皇帝親衛隊兵士

「見せつける時!!」

皇帝親衛隊兵士

「俺たちは——」

皇帝親衛隊兵士

「皇帝親衛隊!!」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「ヒトよ、願え！」

皇帝親衛隊兵士

「願え!!」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「お前たちに、不可能は無い！」

皇帝親衛隊兵士

「不可能は無い!!」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「なぜなら、——オレがいるからだ」

—— 宝具解放 ——

“凱歌を高らかに告げる虹弓” 《アルク・ドウ・トリオンフ・ドウ・レトワール》

奇跡を体現した英雄、共和国皇帝ナポレオン・ボナパルトより放たれる砲火。

絶望を打ち破り、逆境を超える虹色の炎が、轟音を伴い遙か前線に放たれた。

突破

天を駆ける咆哮が地に舞い落ち、業火となってあたり一面を薙ぎ払う。

ヴァルミー丘周辺を焼き払った砲撃も、天才にとつては反撃のための第一手に過ぎなかった。

ミシエル・ネイ元帥

「つづけ!!」

ネイ騎兵

「おおおおお!」

砲煙の中から、鬨の声とともに騎兵部隊が飛び出す。

この奇襲を担ったのは急編成されたミシエル・ネイ元帥率いる騎兵部隊だった。

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「ケホケホ・・・目くらましに宝具の砲煙を使うなんて、なんて男なの!」

ネイ騎兵

「奇襲成功!! ヴァルミー丘周辺の残存敵部隊、突然の我らの出現に狼狽している模様」

ミシエル。ネイ元帥

「このまま蹂躪する！」

ネイ騎兵

「おおおお!!」

矛を交える必要すらない。馬蹄で踏みつぶす。無数の王陸軍兵士が吹き飛ばされ、宙を舞う。

ネイ騎兵

「丘の奪還に成功！」

ミシエル・ネイ元帥

「とどまっている暇はねえ。速度を落とすな！」

ネイ騎兵

「おおおお！」

王陸軍将校

「丘を、奪還されただと！」

王陸軍兵士

「後方遮断。我々は完全に孤立しました！」

王陸軍将校

「いかん、全軍後退、戻るんだ！」

王陸軍兵士

「沼地に逃げ込んだ敵が反転攻勢をかけてきました！ 後退できません！」

王陸軍将校

「なんだと?!」

——その瞬間、戦争の流れは完全に逆転した——

まるで電流が大地を駆け巡ったかのように、王陸軍全体に動揺が走る。

攻守は瞬く間に入れ替わり、王陸軍側が、完全に後手にまわることとなった。

“戦争で最も重要なことは、主導権イニシアティブを取ること。そして主導権とは古来より、機動をもつてのみ確保される”

そして機動に特化した兵科こそ、騎兵であった。

騎兵とは天才の兵科である。

この機動力に長ける反面、防御力に決定的に劣るこの兵科を使いこなせる人物は、歴史以上数えるほどしかない。

——英雄ナポレオン・ボナパルト——

彼は間違いなくその一人であり、あらゆる才能の中で最も稀有な才能、すなわち“軍才”を有する英傑、その中でも最高峰に存在する天才だった。

ミシエル・ネイ元帥

「このまま敵中央を食い破り、敵本陣に突撃する!!」

ネイ騎兵

「おおおお!!」

そして天才ナポレオンが抜擢した大陸軍一の勇将、ミシエル・ネイ元帥は、その期待に応えうる類まれなる指揮官の一人だった。

だが、王陸軍を率いる指揮官は凡将ではない。

“大元帥”

そう称し、敵対する王大陸軍を率いる“彼”もまた、かつて天才ナポレオンが抜擢した逸材の一人であり――

ネイ騎兵

「前方に敵部隊！ 方陣を展開！ 砲兵、こちらに狙いを定めてます！」

ミシエル・ネイ元帥

「なんだと！ この奇襲に備えてやがったのか！」

カリー・ド・マルシエ（コウモリ）

「――あんたたちの皇帝より伝令よ」

カリー・ド・マルシエ（コウモリ）

「“俺を信じてこのまま突っ込め”、だつてさ」

マシユ

「カリーさん！」

カリー・ド・マルシエ（コウモリ）

「吸血鬼を使い走りにするなんて、吸血鬼使いの荒い男ね」

ミシエル・ネイ元帥

「突っ込むってマジか？　なんかすんごくワールローっぽいんだが！　今更だが、アイツ前に一度裏切ったことを恨んでないよな？」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「今更ビビってるの？　フランス一の勇者が聞いてあきれるわね！」

ミシエル・ネイ元帥

「ふん！　女に笑われるほど腐っちゃいねえ！」

大陸軍元帥の死にざまをみよ！　全騎、俺に続け！」

ネイ騎兵

「元帥を死なすな！」

ネイ騎兵

「元帥の前に出ろ！　俺たちが盾になるんだ！」

＜ダヴィンチちゃん＞

『——待って、後方より急速接近する熱源を確認！　これは!?!』

マシユ

「ナポレオンさん宝具!?!　2発目!?!」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「アタシたちに直撃するコースよ」

ミシエル・ネイ元帥

「アイツ、俺たちごと敵を焼き払う気か!?!」

マシユ

「させません。」

宝具上方展開　『今は遙か理想の城』（ロード・キヤメロット）!!』

マシユが展開した宝具、円卓の騎士団の伝説の居城、その伝説を具現化したその宝具が、業火から味方を守るために展開される。

ネイ騎兵

「おおー!」

ネイ騎兵

「すごい!」

ネイ騎兵

「巨大な盾で、あの砲撃をしのいだ！」

ネイ騎兵

「前方の敵砲兵部隊、壊滅！」

ネイ騎兵

「味方の損害、——ありません！」

マシユ

「——ナポレオンさんは私の宝具で防げるギリギリまで攻撃力を落としていたみたいです」

ミシエル・ネイ元帥

「アイツ、これを計算にいられたのか！」

へっ、性格の悪さは、変わってねえぜ」

立香

「これが、天才——」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「天才だかなんだか知らないけど、アタシの背中を撃つなんて、今度会ったらひっぱたいてやる！」

ミシエル・ネイ元帥

「俺の分も頼んだぜ！ 聖魔女様！」

ミシエル・ネイ元帥

「敵部隊は崩れた！ このまま中央を蹂躪し、敵本陣を強襲する！
いくぞおおおおお!!」

ネイ騎兵

「おおおおおおおおお！」

矛盾の皇帝

【王大陸軍ロワ・グランダルメ司令部】

王大陸軍参謀

「巨大な盾のようなものに守られた敵騎兵が炎の雨の中を突破してきます」

王大陸軍将校

「先頭に立っているのは、ネイ元帥なのか？」

王大陸軍将校

「中央が突破されました。大元帥、ここは危険です」

王大陸軍ナポレオン大元帥（?）

「お見事です。皇帝」

王大陸軍参謀

「大元帥閣下!?!」

王大陸軍ナポレオン大元帥（?）

「——見よ、あれこそ、奇跡の光。」

「戦場で何度も戦場でお見かけした、軍神の威光……」

王大陸軍ナポレオン大元帥（?）

「皇帝、ついにお目覚めになったのですね」

王大陸軍将校

「敵陣内にジョセフィーヌ皇后のお姿を見たとの情報があり、兵たちが動揺しております」

王大陸軍将校

「急進！」

前線の兵たちが、雪崩をうつつように敵に投降していきます。戦線、維持できません」

王大陸軍将校

「なんだと！」

王大陸軍ナポレオン大元帥（?）

「仕方あるまい。大陸軍の将兵にとって、皇帝の元で戦うことは無上の喜び。所詮我々は、偽物に過ぎんのだ」

王陸軍ナポレオン大元帥（?）

「だが、偽物には偽物の意地がある。」

全軍に伝令。この戦場は放棄、パリを迂回しヴェルサイユに向かう」

マシユ

「敵、後退していきます！」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「敵が逃げ出した、つてことは？」

ミシエル・ネイ元帥

「俺たちの勝利だ!!」

大陸軍兵士

「勝ったぞー！」

皇帝親衛隊兵士

「皇帝万歳、皇后万歳」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「——ネイ、軍をあれだけ見事に指揮することが出来るヤツは、俺は一人しか知らねえ」

ミシエル・ネイ元帥

「同感です皇帝。そして“不敗”の彼が、敗北するのを見たのは初めてです」

皇帝ナポレオン・ボナパルト

「行かねばならぬな、ヴェルサイユまで。アイツから真実を聞き出すために」

共和国皇后ジョセフィーヌ・ローズ

「アンタたちなに辛気臭い顔しているのよ？ 勝ったのよ、もつと喜ばなきや」

大陸軍兵士

「さすが皇帝の勝利の女神、ジョセフィーヌ皇后だ」

共和国皇后ジョセフィーヌ・ローズ

「おほほ、ありがと、みんなの勝利よ」

大陸軍兵士

「ばあさん最高！」

共和国皇后ジョセフィーヌ・ローズ

「ちよつと！ そのあだ名は禁止つて言つたでしょ？ もう一度そのあだ名で呼んだら

ぶち殺すからね！」

ミシエル・ネイ元帥

「ははは、テレーズ嬢ちゃん皇后も悪くないが、やっぱり皇帝にはジョセフィーヌ皇后だな。負ける気がしねえぜ」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「・・・そうだな」

大陸軍兵士

「皇帝万歳！　皇后万歳！　祖国万歳！」

大陸軍兵士

「俺たちの皇帝万歳！」

皇帝親衛隊兵士

「共和国の皇帝万歳！」

シエイエス

「……………」

元共和国統領シエイエス

「戦争には勝った。だが……なんてことだ」

元共和国統領シエイエス

「王政を否定した市民が、帝政を受け入れるというのか？」

元共和国臨時統領シエイエス

「共和国の皇帝……なんとという矛盾した言葉。」

だがこの矛盾した言葉が、かくも甘美な響きをもつとは……」

元共和国臨時統領シエイエス

「——これが、『英雄』」

サン||ジエスト

サン||ジエスト

「——あの野郎、革命を、喰いやがった！」

サン||ジエスト

「革命の理念も人類の理想も、フランスの栄光に、いや自身の野望に転換しやがった。

俺もルイもロベスピエールも、アイツを生み出すための布石だったとでもいうのか

？」

サン||ジエスト

「——認めん、認めんぞ！ 革命の理念は決して奪われるようなものではない。ロベス

ピエールの理想が、こんな形で潰えるわけがない」

サン||ジエスト

「ナポレオン・ボナパルト。勝利が人民を酔わせている今は、お前の天下だ」

サン||ジエスト

「だが人民が戦いに疲れ、その酔いが冷めた瞬間、オレはお前の帝政に対して革命を起こ

す」

サン||ジエスト

「それまでのつかの間の栄光を、
味わうがいい」

女帝マリア・テレジア

〈回想・女帝マリア・テレジア〉

『幸いなるオーストリアの花嫁よ、結婚せよ。』

戦いの神マルスが与えしものを、美の神ヴィーナスにより授けられん』

政略結婚により大国の地位を築いたオーストリアの皇女として生まれた私には、当然のごとく、政略結婚が宿命づけられていた。

ハプスブルク家の娘達が受け入れてきたその運命を、まだ幼い王女だった私も、当然の様に受け入れていた。

——だが、わずか9歳の私が恋をしたのは、取るに足らない小国の、15歳の王子様だった——

幼き娘が夢中になったはじめての恋。

それは本来なら、穏やかにうち捨てられるべき、儂い夢の如きもの。

だが国是に反したその初恋の成就を、寛大なる父皇帝は認めてくれた。

それはオーストリアの伝統と、国益に背いた奇跡のような恋愛結婚

そしてそれは私の本来の婚約者との長い戦いの始まりでもあった

——フリードリヒ・ヴィルヘルム二世——

軍神マルスの加護を受けし、後に大王と称される稀代の名君

そして私が本来の婚約者だった人物

彼は大改革を行い、中堅国家だったプロシアを比類なき軍事国家に押し上げる

そして父の跡を継いだ私の皇位継承を不服とし、オーストリアに宣戦してきたのだ。

婚姻政策に頼り、尚武の伝統を失ったオーストリア軍は弱く、敗退を重ねる

私は乳飲み子を抱え、国内の諸民族の元に赴く

彼らの支持を取り付け、我が国民にする必要があつた

「——私を愛しなさい

そして我が臣民になりなさい!!」

帝王学など受けたことはない、乳飲み子を抱えた若い女王の拙い言葉は、かえつて人々の心を打った。

彼らは我が臣民となることを約束してくれたのだ。

私は彼らを慈しみ、学校を建て、減税に勤め、そして彼らは私に忠誠を尽くしてくれ
た。

そうして、あの宿敵フリードリッヒ大王の烈火のごとき猛攻から、かろうじて帝国を

守りぬいたのだった。

自らの決断と運命に、後悔は微塵もない。

夫はフリードリヒのような様な軍才は無かったが、穏やかで誠実な人物であり、夫との間には16人もの子供を誕生し、私はそれぞれを立派に成長させたのだから。

だが、それでもふと思うことはある

もし私が自らの恋心ではなく、政略結婚たるオーストリアの国是に従っていれば

あのフリードリヒ大王と結婚していれば、無益な戦争は起こらず、オーストリアとプロシアの連合国家はヨーロッパを容易に制覇していたのではないか？

それが王族たる自らに課せられた本来の使命であつたのではないか？

そんな後悔の念は、ついに私の心から消え去ることは無かった。

そしてその思いは、我が最愛の娘、マリー・アントワネットを大國フランスに嫁がせることに決意させた。

本来のオーストリアの掟にしたがつた政略結婚。

わずか15歳の娘に課した使命

その決断が、祖国の栄光と、ヨーロッパの平和、そして娘の幸せにつながることを祈りながら、私は長い治世を終えた

英霊には、必要な知識が与えられる。

英霊となつた私が得た知識は、その思いの全てを根底から、完全に打ち砕くものだった。

愚かなる王妃マリー・アントワネットの莫大な浪費に対するフランス市民の怒りは、フランス革命の引き金となり、

無力な夫ルイ16と妻マリーは、地位と名譽、その全てを奪われたうえで処刑された。そしてその子、私の孫にあたる幼きルイ17世は、薄暗いタンブル塔で死ぬまで虐待され続けた。

娘と孫を救出しようとしたオーストリアは列強と手を組み大軍をフランスに差し向けたものの

梟雄ナポレオンによつて撃退され、逆にウィーンを含むヨーロッパの大半を蹂躪されてしまった。

そして16年にわたつて続いた戦乱によつて、数百万の民が命を落とした。

娘の幸福、

孫の未来、

祖国の栄光、

そしてヨーロッパの平和

娘の政略結婚に託した思いの全ては、完膚きままに打ち砕かれたのだ。私の、誤った決断によって。

再び現界した私は、自ら娘の代わりとしてヴェルサイユ宮殿に乗り込み、培ってきた政治手腕と、外法とされた魔術の力までも用いて歴史に抗った。

まるで美の神ヴィーナスの加護を受けた人間の様に、あらゆる手段で王権を維持しようとした王妃。

だがその努力はことごとく打ち砕かれる。

そして軍神マルスの加護を受けし軍人達は、遂にヴェルサイユに至ることとなる。

—— 『終章・黄昏のヴェルサイユ宮殿』 ——

【フリードリッヒ大王】

マリア・テレジアの宿敵にして、元婚約者

軍神マルスに愛された天才で、ナポレオンがイスカンダル並みに尊敬する人物。

幼き日のマリア・テレジアに一目ぼれし、結婚を申し込むが拒否され、女嫌いとなる小国プロシアを率い、執拗に超大国オーストリアに侵攻を続け、しかも勝ち続けた彼にとって、オーストリアとの戦争は、マリア・テレジアと繋がるための唯一の手段

だったという

マリア・テレジアにとってははた迷惑な、史上最強のストーカー大王

なおマリア・テレジアは「なんかあの男と同じ匂いがする」と、ナポレオンも嫌っている（とぼつちり）

【若き日のマリア・テレジア】

帝王学は受けたことがなかったが、政治的な感性は抜群

国民に愛されることがこの時代のオーストリアには最重要であることと

また国民に愛される術を直感的に理解していた愛されギャル女帝

経験を積んで、知識が直感に追いついていくタイプ

マリー・アントワネットと同じタイプだが、マリーの場合は異国フランスであることが致命的にマイナスであり、

真逆の「憎まれ王妃」の役割を担う事になってしまった

宝具は「幸いなるオーストリアの花嫁よ」（プロテーシラーオス）

即位式の招待

大陸軍兵士

「皇帝、敵の大半が皇帝を慕って降伏、残りはヴェルサイユに退却しました」

大陸軍兵士

「元臨時総裁のシェイエス氏が皇帝を認め、協力するとの事です」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「革命のモグラはどうでもいい。あの男、サン＝ジエストはどうした？」

大陸軍兵士

「サン＝ジエスト氏の姿は見えません」

大陸軍兵士

「治療中のロベスピエール氏を連れて逃亡した模様」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「そうか。惜しい男だが、帝政に賛成するような男ではなかったな」

ミシエル・ネイ元帥

「だからジエネットちゃんは男じゃないって」

共和国皇后ジョセフィーヌ・ローズ

「まだ言ってる!」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「軍を再編成し、ヴェルサイユに向かう」

立香

「後は王妃マリア・テレジアが保有する聖杯を回収するだけだね」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「長い戦いだっただけ、やっと終わりね」

マシユ

「はい」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「楽勝・・・と言いたいところだが、あの王妃にヴェルサイユに籠城されると厄介だな」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「どうして? 巨大とはいえただの宮殿、要塞じゃないでしょ?」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「宮殿でゲリラ戦を展開されると面倒だ。それに王大陸軍を率いる“アイツ”は籠城戦のプロでもある。籠城のための準備時間を与えたくないが、こちらも軍の再編に時間が

必要だ」

立香

「敵の指揮官に心当たりがあるの？」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「まあ、な」

ミシエル・ネイ元帥

「・・・」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「それに俺の大陸軍は軍規は厳しい方だが、ヴェルサイユで決戦となれば略奪を抑えるのは難しいだろう」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「もちろんヴェルサイユごと焼き払ってしまえばいいんだが——」

元臨時統領シエイエス

「ヴェ、ベルサイユを焼くのはダメだ。あれはフランスの至宝だと言っているだろう？」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「と、言うわけだ。」

俺は必要となつたらモスクワもウィーンも焼く男だが、できればあの宮殿は壊したくないな」

共和国皇后ジョセフィーヌ・ローズ

「皇帝！ ヴェルサイユから使者が来たわよ」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「なんだと!?! 講和の使者か?」

共和国皇后ジョセフィーヌ・ローズ

「それがね。」

なんと国王就任式の “招待状” なのよ」

<ダヴィンチちゃん>

『国王就任式の招待状だって?』

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「俺をフランス国王にでもしてくれるのか?」

共和国皇后ジョセフィーヌ・ローズ

「バカ、違うわよ! 届いているのは参列者としての “招待状” よ。」

立香、あなたたちの分もあるわ」

立香

「どういふこと?」

共和国皇后ジョセフィーヌ・ローズ

「さあ、わからないわ。あの王妃、敗戦で頭がおかしくなったのかしら?」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「いや、王妃はそんな器じゃない。彼女はメッテルニヒ並の難敵のはずだ。

さて、どうするかな」

マシユ

「……………」

立香

「行ってみよう」

共和国皇后ジョセフィーヌ・ローズ

「え、行くの?!」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「ほう……………」

立香

「どうせ絶対王妃に会わないとダメだし」

ミシエル・ネイ元帥

「なら招待を受け、正面から行こうってか。」

あははは、あんた俺と同じくらい馬鹿だな。気に入ったぜ！」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「そうね。私も行けばいいと思う。どうせ戦うなら、正面から乗り込めばいい」

共和国皇后ジョセフィーヌ・ローズ

「ちよつと本気？」

ねえ皇帝、何とか言つてよ！ 明らかな罠よ」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「——いや、俺も招待を受けるのに賛成だ。今の俺たち相手に、老獪な王妃がどんな手を打ってくるのか、興味がある」

共和国皇后ジョセフィーヌ・ローズ

「貴方まで何てこと言うのよ?!」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「親衛隊の精鋭を連れていく。残り的大陸軍は、ヴェルサイユを包囲しつつ待機！ 必要な場合は攻撃命令を下す」

運命の皇子

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「こいつは驚いた・・・」

マシユ

「はい。てつきり宮殿で戦う準備をしていたと思っていました・・・」
〈ダヴィンチちゃん〉

『この豪華な装い、整然とした宮中、データにある即位式と同じ装いだ。
本当に国王の就任式を行うつもりみたいだ』

王大陸軍ナポレオン大元帥

「・・・」

マシユ

「あれは・・・」

立香

「大元帥ナポレオン。いや、偽のナポレオン」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「久しぶりだな、ダヴー」

ダヴー元帥（偽ナポレオン大元帥）

「はい。お久しぶりです、皇帝」

〈ダヴィンチちゃん〉

『ルイ＝ニコラ・ダヴー。ナポレオンの忠臣にして、生涯無敗を誇った大陸軍最強の元帥、通称“不敗のダヴー” 彼が偽ナポレオンの正体だったのか』

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「お前には聞きたいことがあるが、後にしてやる。

王妃はどこにいる？」

ダヴー元帥

「ご案内します」

ダヴー元帥

「王妃殿下、招待客のご一行をお連れしました」

マリア・テレジア

「客人たちよ、よく来てくれました」

マリア・テレジア

「そして大元帥。仮初の君主とはいえ、今までよく私に忠誠を尽くしてくれました」

ダヴー元帥

「もつたいないお言葉です。しかし、私は敗れました。敗戦の責任は、すべて私にあります」

マリア・テレジア

「いいえ、貴方は任務を全うしました。」

貴方のおかげで、戴冠式の準備が整ったのですから」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「戴冠式ねえ、誰が王になろうとも、すでにこの国の主権は国民にある。無駄なことだ」

マリア・テレジア

「——共和国の皇帝にして、軍神マルスの眷属ナポレオン・ボナパルトよ。」

民衆が自らの意志で銃を持ち、国家の「主権」を、民衆が行使するようになれば、それがいかなる悲劇と殺戮をもたらすか、貴方なら理解できるはずですよ」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「——否定はしない。それが、「新しい時代」だ」

マリア・テレジア

「幼子たる臣民達よ。あなた方が主権を得るにはまだ幼い。子供達が主権という武器を持って、行く先は大いなる悲劇だけなのです」

マリア・テレジア

「貴方達に与えた主権を、絶対君主の名において回収します」

共和国皇帝ナポレオン・

ボナパルト

「オーストリア人であるアンタがこの国の国王に即位するのかわ？　なら話は早い。主権が王であれ国民であれ、アンタはフランス国民にとってはただの侵略者にすぎないからな」

マリア・テレジア

「私ではありません。」

この国の国王にふさわしい人物は、*“彼”*ただ一人」

そうつぶやくと、自らの後ろ、玉座に腰かけていた金髪碧眼の幼子に王冠をかぶせ

恭しく敬礼した。

マリア・テレジア

「貴方こそ、この国の王、ルイ17世」

<ダヴィンチちゃん>

『ルイ17世・・・ルイ16世とマリー・アントワネットの息子、伝承ではルイ16世処刑後に幽閉されていたテンプル塔の中で、マリー・アントワネット達によって国王に就

任したという悲劇の王子』

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「あの少年が？」

〈ダヴィンチちゃん〉

『両親が処刑された後、革命派によつて徹底的に虐待され、獄中で病死したとされている。まさにフランス革命の暗部の象徴と言える少年』

マシユ

「くっ……」

マリア・テレジア

「魔導の権威は敗れ、偽りの大陸軍は梟雄ナポレオンに撃破されました

結局は力を持った軍人が台頭する。あの忌むべき我が宿敵と同じ」

マリア・テレジア

「しかし、私たちのはこの宮殿宝具、ヴェルサイユ宮殿がある」

マリア・テレジア

「愛しい我が孫ルイよ。

無力な父に見捨てられ

愚かな母が救えなくても

——貴方には、この祖母がいる」

マリア・テレジア

「ブルボンとハプスブルクの血を引く、最も高貴な王子よ

ヨーロッパに平和をもたらすはずだった運命の王子よ

今こそ、ヴィーナスの加護の元に太陽王の地位を継ぐのです」

<ダヴィンチちゃん>

『魔力増大！ これは、歴代のブルボン王朝の霊基？ それだけじゃない、ハプスブルク

家の霊基も確認！』

マリア・テレジア

「来なさい軍神マルスの眷族達よ。

ハプスブルク家ヴィーナスの加護と、太陽王アポロンの威光を知りなさい！」

<ダヴィンチちゃん>

『ルイ17世の霊基解析——クラス「アヴァンジャー」』

ルイ17世

「——朕は、国家なり……」

少年は虚ろな瞳のまま、かつて絶対者として君臨した、太陽王の言葉を紡ぐ。

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「来るぞ！ 全員戦闘準備」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「これが最終決戦よ！」

フランス人民の王

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「倒した？」

ルイ17世

「……」

マシユ

「ルイ17世の肉体、再生していきます」

〈ダヴィンチちゃん〉

『魔力、再び増大。この魔力、無尽蔵なのか？』

マリア・テレジア

「当然です。ここは太陽王の象徴たるヴェルサイユ宮殿なので。貴方達は“宮殿宝具”の懐の中であがく虫けらにすぎません」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「どうするのよ？」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「仕方ない。マスター、令呪のバックアップを頼む！」

俺の宝具を全力でぶつ飛ばして、ヴェルサイユ宮殿を破壊する。

同時に大陸軍の全軍を突入させる。こうなった以上、宮殿を瓦礫の山に変えるしかない」

立香

「それしかないのか——」

???

「——それには及ばないよ。共和国の皇帝よ」

マシユ

「あ、貴方は？」

立香

「カペー店長！」

ルイ16世

「やあ。また会ったね。カルデアの諸君」

マリア・テレジア

「貴方がなぜここに？　そうか、フーシエが裏切ったのですね」

ルイ16世は、乳房の形をたどった陶器でできた杯を、息子たる17世に与える。

カリー・ド・マルシエ

「あれは、性杯？」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「だからその名でよぶなつての！」

ルイ17世

「かあ、さま……」

ルイ16世

「そうだ、息子よ。これは母がお前に与えたものだ」

マシユ

「ルイ17世が、穏やかな表情に——」

〈ダヴィンチちゃん〉

『ルイ17世の魔力、減少。どうということだ？』

マリア・テレジア

「……それは娘マリーの乳房をかたどつた陶器。

乱れた宮中と愚かな娘の象徴たるその陶器が、なぜ孫の怒りを鎮めるのです？」

ルイ16世

「義母上、これはマリーが淫らな目的で作らせたものではありません。なかなか乳離れ

できなかつたこの子のために、マリーが自らの乳房を模して造らせたミルク飲みなので
す」

王妃マリー・テレーズ

「
」
マリア・テレジア

「……なぜ、そのことを公にしなかつたのです？　娘の名誉にかかわることでしょう
に……」

ルイ16世

「私も同じことをマリーにいたしました、しかし彼女はこう反論したのです」

ルイ16世

「王者たる使命を受けたこの子が乳離れが遅れたという事実は、この子の不名誉になる。
淫らで愚かな王妃が享樂のために作らせたという事でいい、汚れ役は私がよろこんで引
き受けるわ、と」

マリア・テレジア

「……」

ルイ16世

「慣れぬ異国の宮中で、彼女は必死に妻たろう母たろうと努力したのです」

マリア・テレジア

「——私の、誤解だったというのですか」

ルイ16世

「フランス人民の王の名において、ここに宣言する。

朕は、国家ならず！」

〈ダヴィンチちゃん〉

『——国王の絶対性を否定

ルイ17世の魔力、完全に消滅！』

マリア・テレジア

「——」

ルイ16世

「共和国の皇帝よ、ボクは王室をたたむ。だが人民たる諸君らを恨まない」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「——ああ国王よ、確かに了解した。

貴方の廃位と、国民への主権の移譲を受け入れよう」

マリア・テレジア

「フランス国王ルイ16世、なぜあなたはそうまで戦うことを拒むのですか？ 貴方が

強権を發動すれば、革命を潰すことも不可能ではなかったはずです」

ルイ16世

「ボクはどんなことがあつても逃げない。彼らの愛も憎悪も、全て受け入れる。妻とそう誓ったからです」

ルイ16世

「帝王学に『君主は愛されるより恐れられよ』との言葉があります」

マリア・テレジア

「マキヤベリの君主論の一節ですね」

ルイ16世

「しかし、あまりに有名なその言葉に比べて、次の言葉は知られていません」

——『何故なら、愛は憎悪に変わりやすいから——』

ルイ16世

「王者としても教育を受けたボクはその言葉を理解しているつもりでした」

ルイ16世

「だがその言葉の真の意味を思い知ったのは、フランスから逃げ出そうとして失敗した、いわゆるヴァレンヌ逃亡事件の後でした」

ルイ16世

「ボクを深く愛してくれていた民衆ほど、向けられる憎悪の炎は苛烈なものとなり——」

ルイ16世

「ボクに大きな期待を寄せていた民衆ほど、その失望いものとなりました」

ルイ16世

「そしてその時、ボクはどれだけ彼らに愛され、期待されていたのかを知りました」

ルイ16世

「そして家族で誓ったのです。

これからは、どんなことがあっても、この宿命を、彼らの愛と憎悪を受け入れようと」

ルイ16世

「たとえ断頭台の露と消えることになろうとも、決して彼らを恨まない」

ルイ16世

「何故なら、その憎悪は、彼らからの愛情の裏返しなのだから」

ルイ16世

「ボク達は国民に愛されていたのですよ、義母上。

貴女と同じように。

国王として、これ以上の幸福がありませんか？」

マリー王妃

「・・・・・・・・」

ルイ16世

「後悔の思いがあるのなら、あの日、マリーと家族だけを逃がすべきだったという後悔だけです。国王たるボクだけが、最後まで残るべきでした」

マシユ

「・・・・・・・・」

マシユ

「いいえ、多分ですが・・・マリーさんは国王を残しては逃げたりはしなかったと思います。貴方が残るなら私も残る」と、言われたのではないのでしょうか？」

ルイ16世

「はは、確かに君はマリーの友人だ。」

同感だ。きっと彼女はそう言ったろうね」

マリア・テレジア

「ふう、無抵抗主義も、こまで行けば立派な信念ね。」

政略結婚とはいえ、私が選んだ相手は間違っていないかったです」

マリア・テレジア

「最後に一つ、カルデアのみなさんに、教えていただきたい。」

「貴方が知るマリーは、どんな娘でしたか？」

マシユ

「……はい。フランスの民衆のために、その身を投げ出した、立派な王妃様でした」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「……」

マリア・テレジア

「そう……」

——よくできたわね、マリー」

その横顔は、どこまでも透き通った、娘を誇らしく思う母親の穏やかな笑顔だった。

ルイ16世

「ボクも教えてほしい。」

この権威の象徴たるベルサイユ宮殿は、やはり市民によって破壊されるのかね？」

マシユ

「いいえ、現代でも現存しています。」

ベルサイユ宮殿を守ろうとする市民の寄付金によって

そして多くの観光客を魅了し続けています」

ルイ16世

「そうか、愛憎の時代の果てに、王朝は遂に市民と歴史を共有するに至ったわけか」

ルイ16世

「ならばもはや悔いはない」

マリア・テレジア

「これは貴方達にかえします」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「せ、《聖杯》」

マリア・テレジア

「では、孫と共に行きましょう。」

婿殿。エスコートをお願いします」

ルイ16世

「よろこんで、義母上様」

不敗の元帥（完結）

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「最後に残ったのは、お前だけだな、ダヴー」

ダヴー元帥

「はい」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「さすがだな。」

仮の君主とはいえ最後まで忠誠を尽くすとは、都合が悪くなると裏切る連中とは大違いだ」

共和国皇后ジョセフィーヌ・ローズ

「だってさ、聞こえてる、ネイ？」

ミシエル・ネイ元帥

（ドキッ!! やっぱ俺が裏切った事を根に持つてる。絶対根に持つてる!）

ダヴー

「贖罪をいたします、皇帝」

そういうとダヴーは静かに帽子を取る。

その頭髮は、まるで山火事の跡の山のように無残に枯れ果てていた。

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「聞きたいことは一つだけだ。」

なぜ俺を名乗った？」

ダヴー元帥

「——貴方に、ナポレオンになりたかったからです」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「……」

ダヴー元帥

「戦場で奇跡を起こし続ける貴方は、私にとつては軍神そのものでした。私は軍神としての貴方が創り出す伝説の一部となることが、この上なく幸せでした」

ダヴー元帥

「しかしロシア遠征の頃から、貴方は軍神としての輝きを、次第に失っていきました」
敬愛の念はいっしか反転し、苛立ちは憎悪へと変化していきました」

ダヴー元帥

「そしてワートルローの敗戦の折、思ってしまったのです」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「……………」

ダヴー元帥

「私なら勝てた、私の方が強い、私こそ、軍神ナポレオンに相応しいのだと——」

ダヴー

「——思い上がり、万死に値します」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「……………」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「気にするな、ダヴー」

ダヴー元帥

「いいえ、この不敬、この裏切り、軍人として許されるものではありません。大恩ある貴方を裏切り、思い上がって、その名を騙ったのですから——」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「過去の事はいい。俺にだって非はある」

ダヴー元帥

「しかし——」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「気にするな」

ダヴー元帥

「私は、私は——」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「——」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「このハゲ——！！！！」

ダグー元帥

「!!」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「うお!?」

共和国皇后ジョセフィーヌ・ローズ

「ひゃ!!」

マシユ

「い、言っちゃいました．．．」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「違うでしょ、違うでしょ？ 過去の事をネチネチネチネチと・・・」

マシユ

「・・・ジャンヌさんがそれを言いますか」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「——いいかダヴー、尊敬する相手と戦ってみたい!? 尊敬する人間になりたい？」

それは軍人として、当然の思いだ」

ダヴー

「!？」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「俺だってイスカンダルと戦いたい！ イスカンダルになりたい！」

そして競い合い、オレの方が強いと、俺が史上最強だと示したい！」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「そのどこがおかしい？」

お前のその感情は、武人として当然のことなんだ！」

ミシエル・ネイ元帥

「そうだけダヴー、俺だって皇帝に勝ちたいぜ！」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「黙れネイ、お前なんかには負けるか！」

ミシエル・ネイ元帥

「やってみなけりやわかんねえだろ？」

ダヴー元帥

「・・・ふふ、

しかし、完敗でした。やはり私の思い上がりに過ぎなかつたようです」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「当たり前だ。部下にそうそう追い抜かれてたまるか！」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「——だが教えてやる。おれの部下の采配の中で、嫉妬を感じたのはお前だけだ。ダ

ヴー」

ダヴー

「!？」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「ワートルローの時は、先に負けちまつてすまねえ。お前はパリで頑張ってくれてたのにな」

ダヴー元帥

「——こゝ、光栄の極み」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「ちくしょう、ワートルローは勝てた戦いだつたのに……すべてネイのアホが悪いんだ。

こいつが大砲の援護も無しに突撃しやがるから……」

ミシエル・ネイ元帥

「ちよ、とばつちり！ いい話じゃなかったの！」

共和国皇后ジョセフィーヌ・ローズ

「私を捨てて若い女に乗り換えるから、ツキに見放されたのよ」

ミシエル・ネイ元帥

「そうだそうだ」

ダヴー元帥

「ふふ……」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「ネイ、ジョセフィーヌ、ダグー」

我らは栄えある大陸軍

いつの日かまた轡を並べて戦おうぞ！」

ミシエル・ネイ元帥

「おう！」

共和国皇后ジョセフィーヌ・ローズ

「ええ、もちろん」

ダヴー

「御意！」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「おっと、俺たちも消える時間の様だ」

ミシエル・ネイ元帥

「しまった、ジエネットちゃんに告白するの忘れてた」

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「アイツは男だ、あきらめろ」

ミシエル・ネイ元帥

「だから男装の麗人だと言ってるだろ！ なあ皇后？」

共和国皇后ジョセフィーヌ・ローズ

「さあ、自信があるならベッドで確かめてみたらどうかしら？　じゃあねみんな——」

(消滅)

ミシエル・ネイ元帥

「ベッドでついでたらどうするん——」（消滅）

共和国皇帝ナポレオン・ボナパルト

「ではな、今度会つたら勲章くらいはやろう。見事な働きだった——」（消滅）

〈ダヴィンチちゃん〉

『聖杯も回収したし、これで万々歳だね』

マシユ

「私たちも帰りましょう」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「・・・ちよ、ちよと待って！」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「ダヴー元帥、えーと、さっきはその・・・」

ダヴー元帥

「？」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「だから、髪の毛を・・・ごめ・・・」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「・・・」

ジャンヌ・ダルク（オルタ）

「——貴方の生き方、とっても素敵よ。ダヴー」

ダヴー元帥

「!？」

ダヴー元帥（にっこり）

——終——